
エンジェルティアの最強執事

聖幻童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルティアの最強執事

【Nコード】

N2623Y

【作者名】

聖幻童子

【あらすじ】

不良の俺、竜堂政宗りゅうどうせいむねは高校を中退したその日に車にはねられ変なジジイに異世界へ転生させられる。そこでの俺は、その国の王女であるツンデレ美少女の執事になっていた…… って、ちょっと待て！ 普通異世界転生って、勇者になって剣とか魔法で魔王倒すんじゃないの！？ ところが、ゆるふわ不思議お菓子系ロリロリ侍女やアマゾネスみたいなDS筋肉女剣士、フェロモンむんむんの美熟女王妃様や眼鏡ボクっ娘公爵令嬢やらが現れて俺はモテモテハーレム状態に。いや、ちょっとこれ、ヤバくねえ？ WW 喧嘩上等最強執

事ここに見参！ 世の中舐めきってますが、何か？ w (かなり
きわどいエロシーンが出てくる恐れがあります。苦手な方はご注意
ください。また、ゆるゆる不定期更新ですが話もゆるゆる日常系で
進みます。それでも必ず完結させますので、よければお付き合いく
ださい)

第1話 ハゲジジイ

「おらあ！ こんな学校、こつちから辞めてやらあ！」

俺は折れたモップの柄を振り下ろし、窓ガラスを次々と割っている。遠巻きに眺める女子の悲鳴が、俺の逆立った感情を余計に刺激する。

「こらっ、竜堂！ やめんか！」

柔道部顧問の体育教師が、俺を背後から羽交い締めにする。

「放せよ、タコ！ ぶつとばしてやる！」

こつして俺は一年半の高校生活に終止符を打った。

世の中ウゼえことばっかだ。クソ親は俺のことをクソ溜めの汚物みてえな目で見るし、クソ教師どもは学校の体裁ばかり気にしやがる。

周りのヤツらは飼いやられた豚みてえに大人しく、俺には何もかもが色褪せて見えた。

大学教授をしている親父は何かにつけて俺と兄貴を比較した。

兄貴は常に成績優秀で優等生。一流大学にトップで入ってエリート街道まっしぐら。

母親の口癖は「あなたもお兄ちゃんみたいだったらねえ」だ。

「けっ！」

道端に唾を吐き、ポケットの中のタバコを取り出す。くそっ、空だし。

俺は不正入手したタスポでタバコを自販機で買おうとしたが、財布に二百円しか入っていないことに気づく。

「くっそっ！」

蹴った空き缶が歩道を転がっていく。夕暮れ時の町に空き缶の高い音が響き、塾に行くらしい男子中学生が怯えた表情で立ち止まっている。

「なんだよ、うらあ！」

金がねえならカツアゲでもしようかと、その中学生へ近づいていく。

「ひっ！」

踵を返して走り出すその中学生を追って、俺も走り出す。

くっそ、速えし！

日頃ニコチン漬けになってるだけに、すぐに息が上がってしまう。それでも中坊の頃は陸上部に勧誘されたぐらいなだけだな。

逃げる中学生を追って角を曲がると、いきなり目の前に夕暮れの赤い空が広がる。

車にはねられたのだと気づいた時、俺の頭には今までのくそつたれな人生がまさに走馬燈のように流れてきた。

ああ、つまんねえ人生だったなあ。

今度生まれ変わったら、もう少しましな人生を送りてえもんだ。

……って、あれ？

いつまでも夕焼けの赤い空が広がっている。まるで時間が止まったように景色が固定されている。俺はいつの間にか黄昏の空の真っ只中に浮かんでいた。

死んで魂だけになっちまったのかな？ まあそれもいいか。痛い思いするよりいいし。

妙に達観した気持ちになっていると、目の前に白い光が現れた。それは次第に強くなっていき、中から八ゲたジジイが出てきた。

「ふおっふおっふお、見事にはね飛ばされおったのう」

「なんだジジイ」

そのジジイは真っ白いシーツのような布地を着ていた。そうまさにシーツの真ん中に穴を開けて、そこに首を突っ込んだような感じだ。服っつーより、布だな。

頭には毛は一本も生えてなく、眉毛と口ひげも真っ白だ。

右手に持った木の杖の上部は歪に膨らんでいて、仙人か魔法使い

といった感じだ。

「これ！」

右手に持った杖で頭を叩かれる。

「痛えっ！ つて何で痛えんだ？」

「年長者は敬え、このバカモンが」

「おいハゲ、質問に答える。ここはなんだ？ 俺は死んだんじゃないのか？」

「ハゲたくてハゲたわけじゃないわい！ まったくこれだから地球の若者は好かん」

「地球？」

そう思った時、このジジイが普通と違うことに気づいた。全身が淡い光に包まれ、瞳が澄んだ水色をしている。明らかに日本人じゃねえ！

「お、お前神様か？」

「ふん」

ジジイは鼻息を荒くして、口ひげを揺らす。

「そう思うならそれでも構わん。とにかく貴様には選択してもらわなければいかん」

「選択？」

周囲は相変わらず黄昏の空だ。俺とジジイは空中に浮かんだまま静止している。叩かれて痛いつてことは、これ夢じゃねえんだよな？

「このまま地面に叩きつけられぐちゃぐちゃになって死ぬか、生き残るチャンスを得るか…… じゃ」

「よし、死ぬ！」

「ぶっ！」

ジジイは唾を飛ばす。

「き、汚ねえ！ なにすんだよ！」

「貴様はどうしようもないヤツじゃのう」

ジジイは長くて白い眉毛を下げて、俺を哀れみの目で見る。

「チャンスとかめんどくせえ。どうせ生きてたっていいことなんか

ねえし、さつさと死んで生まれ変わった方がよっぽどいいし」

「生まれ変わったらミミズじゃったりしてな」

「う……」

それは想定外だった。

「蚊とかに生まれ変わって叩きつぶされたりしたりの」

「うう…… それは…… イヤだ」

「じゃろう？」

ジジイのドヤ顔がめっちゃムカついたが、ここは一応大人しく話を聞いておこう。

「チャンスってどんなんだよ」

「なあに、簡単じゃよ！」

ジジイは途端に顔中をしわだらけにしてニコニコする。くそっ、ぶつとばしてえ。

「美少女を一人助けて欲しいんじゃよ」

「美少女？」

俺は思わず身を乗り出す。俺はこう見えても彼女いない歴〃年齢だ。

「うむ。さすれば貴様は生き残れるじゃろう」

「よし、乗った！」

「ぶっ！」

ジジイはまた唾を吐く。飛沫が顔に掛かって、俺は思いつきり学ランの袖で拭く。

「汚ねえからいちいち俺の顔に吹き出すなっつーの！」

「お前は本当に軽いのお。まあよい、詳しくは転生先で聞くがよい」
そういうとジジイは白い光の中へ溶け込むように薄くなっていく。

「お、おい、ちょっと待てよ！ 転生ってなんだよ！ 俺は何をすればいいんだよ！」

「一つだけ、貴様には特別な能力を与えておく。よく考えて使うがよい。ではなあ……」

ジジイの声にエコーが掛かって遠くなっていく。

「おい、ジジイ！ ハゲ！ おい！ お」
途端に体がかくんと落ちる。
俺はそのまま空をどこまでも落ちていった。

第2話 メイドと犬と眉毛

ぼやん。

ん？

ぼやんぼやん。

んん？

ぼやんぼやんぼやん。

んんん？

何か柔らかくていい匂いがするぞ。

「う……………」

「あ、気がついたですう」

目を開けると俺の目の前におっぱいがあった。

「うわっぶ！」

慌てて頭を上げると、白いエプロンに包まれた巨乳に頭が跳ね返された。

「あん、急に起きあがってはダメですう」

日曜の朝やつてる美少女アニメキャラクターのような声がして、俺の頭がまた柔らかいものに載せられる。フリル付きのエプロンに包まれた二つの巨大な盛り上がりの方こうに、まん丸い目をしたまん丸い顔の美少女がこっちを見下ろしていた。ほっかむりのような白い帽子の方こうに、青空が広がっているのかわかる。ツバメのような鋭角なシルエットを持つ鳥が一羽、白い雲を横切って飛び去っていく。

「え、ええっと……………」

どうやら俺はこの美少女に膝枕されているらしい。なにこのいきなりの萌えシチュ。

「あは、さわさわの髪の毛の毛心地よいですう」

俺は頭をなでなでされている。

ここはどうやら野原の真ん中のような。お乳、いや落ちて着いてく

ると周囲に草の匂いが満ちていることに気づく。遠くで犬の鳴き声がして、美少女は撫でる手を止める。

「ゆっくり起きあがるです」

奇妙なしゃべり方をするこの女の子は、どうやら俺を介抱してくれていたらしい。

俺の頭の中にハゲジジイの声が蘇ってくる。

『美少女を一人助けて欲しいんじゃよ』

『詳しくは転生先で聞くがよい』

「あ、あのよ……こ、ここはどこだ？」

「次は『わたしはダレ』って続くのですう」

イラッ！

「い、いや自分がダレかはわかってるって。お前こそダレだ？」

「うちはシヨコラですう」

「い、いや名前言われても」

少し心残りながら上体を起こすと、周囲の様子が漸く把握できた。どうやらやっぱりここは野原のようだが、少し傾斜している。緩やかな山の斜面のようだ。周囲には赤や黄色の花々が咲き乱れ、季節はどう見たって春。晩秋の日本ではない。学ランでは暑いくらい暖かく、俺は明るい陽射しに目を細める。

野原は校庭より少し広いくらいで、周囲は杉のような針葉樹林に囲まれている。森の中に開けた花畑のような場所だ。

女の子は満面の笑みで俺を見つめている。見た目はどう見ても、メイド喫茶のアルバイトコンパニオンだ。野生のメイドか？ 歳は中学生くらいだから、バイトはできないだろうけど。

脇に置かれた籐籠の中には、周りで咲いている花と同じものが数本横たえられていた。

「え、ええつと、シヨコラつつたか？ ここは何ていう場所だ？」

「ここはエンジェルティア王国ですう。貴方は勇者さんですねえ？」

「え？」

目が点になった。

「勇者マサムネさんではないのですかあ？」

「な、なんで俺の名前知ってたんだ？」

「あは、やっぱりですう」

「むぐう！」

豊満な胸に抱きすくめられる。う、嬉しいけど苦しい！

「ちょ、もが、待て、ちょおつと待て！」

「あん、そんなとこ触っちゃダメですう。怒られるのですう」

俺はとりあえず乳地獄から脱出する。

「ふう…… ふう…… ゆ、勇者ってなんだよ。なんでお前は俺の名前知ってたんだ？」

シヨコラというこのメイドコス美少女は、満面の笑みでうんうん頷いている。

「言い伝えの通りなのですう。王国の危機に、神官のような黒い衣装を着て現れるのですう」

シヨコラは豊満な胸で両手を組んで、目にお星様をいっぱいキラキラさせて俺を見つめている。

「王国の危機で勇者？ つまり俺は、ロープレの主人公になっちゃまったってことか？」

「ろーぷれ？」

シヨコラは小首を傾げる。俺は巨乳好きだけどロリコンじゃないから胸がキコンとはしない。このドキドキはこれから始まる冒険への期待だ。たぶん、きつと、おそろく。

「そっかそっか！」

俺は尻や背中についた草つきれを払いながら立ち上がる。

「そんじゃまず国王様に会わないとな！」

「あは、話が早いですう」

シヨコラは籐籠を持って立ち上がる。ってちつちええ！ この娘の身長は、百七十八センチある俺の肩にも届かねえくらい小さい。胸は発育いいけど、やっぱりロリだな。

「じゃ、うちがお館まで案内するですう」

「おう！」

てとてと歩き出したシヨコラの後について、俺はワクワクし始めた。

これから俺は国王様に会って、伝説の剣とかもらって冒険の旅に出る。ジジイの言ってた「美少女」ってのは、この娘ではないはずだ。俺はそんな単純じゃねえ。おそらく悪い魔王に囚われていて、勇者の俺が颯爽と助け出す。そんで魔王を倒して世界を救っちゃったりなんかしちゃったりして、美少女と結ばれるんだな。
くうう、いいねえ！

俺が握り拳で気合いを入れていると斜面の下、森の方から犬が走ってくる。さっきの鳴き声はこの犬か。

「あ、マサムネだ」

「は？」

「今なんて？」

「勇者様がいつか現れてくださるように、うちが名付けたですう。マサムネ〜！」

シヨコラは大きく手を振りながら走り出す。犬と名前が同じってどうよ。この娘はどうやら天然系の不思議ちゃんらしい…… かわいいから、まあいいか。

「わんわん！」

「マサムネ〜！」

飛びついてきた犬（マサムネ、推定）を、シヨコラがしゃがんで抱きしめる。ちよつとだけ羨ましいと思っただのは内緒だ、ってえええっ？ 俺はマサムネ（犬、現在腰を振っている）を見て驚愕した。

「な、なんだその犬！ ま、眉毛あんじゃん！」

なんと薄茶色で尻尾の大きなその犬（マサムネ、推定雑種）には、ふさふさとした逞しい眉毛が生えていた！

「へ？ 犬には普通眉毛があるですう」

「ねえよ！」

俺はこの異世界のことを、まだ何も知らないのだった。

第3話 危険なドラゴン

「らんらんるー」

「はぁ」

「わんわん」

半分スキップしながらシヨコラはずんずん森の小道を歩いていく。マサムネ（犬眉毛付き）は、時折俺の方を振り返って凜々しい顔で様子見をする。

「キリッ」とか擬音が聞こえてきそうので、その顔を見るたびにイラッとする。

「なぁ、その“お館”ってのはどこにあんだよ」

「もうすぐですよ」

「わん（キリッ）」

イラッ！

森の木陰道は涼しいが、普段運動不足プラスニコチン漬けの俺にはけっこう堪える。そういえばタバコ買えなかったなぁ。

犬っころにいちいちイライラするのは、きつと禁断症状だ。この国にタバコかそれに代わるものってあんのかな。

「なぁ、シヨコラつつたか」

「はいですよ」

「わん（キリッ）」

「いちいちお前が返事すんな！ なぁ、お前あんなところでなにしていたんだ？」

「あは、お花を摘んでたですよ」

「花？」

まるで童話の世界だな。魔王に世界を滅ぼされようって時に、こんな小さな女の子一人で山なんかには花摘みに出ていいのかよ。

「うちは王女様専属の侍女なのです。お花を王女様のお部屋に毎日飾るのは、うちの大切なお仕事なのですきりっ！」

「王女？」

何か話が違ってきたぞ？

「王女つてあれだよな、国王の娘」

「あは、勇者様は面白いのですう。他に王女様つて呼ばれる方はいらつしやらないのですう」

「わん（キリツクスツ）」

「あ、い、今この犬笑つたぞ！」

マサムネ（犬畜生）は、口の端を持ち上げて牙を見せた。あの表情は絶対に笑顔だった。しかも不敵な。

「あはは、犬が笑うわけなのですう。マサムネは楽しい時には尻尾を振るですう」

「いいや、絶対笑つた！ この犬絶対笑つたつて」

「あそこがお館ですう」

俺の主張を華麗にスルーしたシヨコラは、森の切れたところで下方を指さす。そこにはまさに大豪邸と言つて差し支えない建物とそれを取り巻く綺麗な庭が一望できた。

「で、でけえ」

「ここから見える範囲は、ぜんぶ国王様の私有地なのですう」

「ま、まあ一国一城の主だからな。そ、そんならい金持ちなのはあ、当たり前だよな」

正直俺は気後れしていた。今までの十七年間の人生の中、いわゆる上流階級と呼ばれる人種との接点は一切なかった。せいぜいテレビでみる豪邸訪問やセレブタレントぐらいだ。

「“いちじょう”つてなんなのですかあ？」

「かあ、お前そんなことも知らねえのか？ 一城つつたら城に決まってるんだろ。お城だよオ・シ・ロ！」

「おしろ？ マサムネ知ってるですかあ？」

「クウ〜ン」

こいつ城も知らねえのか？ そんなんで魔王の攻撃をしのげると思ってるのか？ やっぱりここは、勇者の俺が城の造り方から教え

てやんねえといけねらしいな。

そうは言っても、俺に築城の知識なんかあるわけもない。小学生の時、一時期クラスで流行ったプラモデルの大阪城作ったくらいだしな。

まあいいか、国を守るのは王様の役目。勇者の俺はどうせすぐ旅に出ちまうんだからな。

「おし、さっさと行こうぜ！ だいたい二キロってどこか？」

「きろ”ってなんですかあ？」

ちっ、単位まで違うのかよ。これだから異世界はめんどくせえ。

そんなくらい融通効かせとけよな。話が長くなっちゃうじゃねえかよ。

「あゝ、俺のいた世界での距離の単位だ。こんくらいが一メートル、その千倍が一キロメートル」

「ふうん、変わった単位ですねえ」

「ここじゃなんて言うんだよ」

「ここはヤード・ポンド法ですう」

「ふうん、そうか…… って、めっちゃ共通点あんじゃねえかよ！」

「あはは、冗談ですう！ メートル法も通じるですう」

シヨコラは笑いながら、マサムネ（犬、現在こつちを見てまたクスツと笑っている）と坂道を駆け下りていく。

「くっそ、待てごるあつ！」

俺は半分マジでキレて追いかける。あれ？ 何か大事な話の流れがあったような…… そんなことが一瞬ちらつと頭をよぎったが、すぐに俺は忘れ去ってしまった。

坂道の下的林を抜けると、かなり広い芝生に出る。ここはさっきの野原の五倍以上は確実にある。まるでゴルフ場だ。しかしゴルフ場にしては、そこら中やたらと穴が空いている。といってもそれほど大穴ではなく、大きめのスコップで掘ったくらいの小さな穴だ。

さらにでかい糞が落ちている。明らかに人間のじゃなく動物ののだ。しかもかなり大型の。かなり臭えんじゃねえかと思っただが、思った

よりは臭くない。どちらかというところ、草の匂いに似ている。

シヨコラとマサムネ（犬、すでに俺の存在は忘れているようだ）は、楽しそうに先を走っていく。ちょっと待て、勇者様を案内するんじゃないかったのか？ こんな糞だらけの場所に置いてきぼりにするってどういう……ん？

俺はいきなり辺りが真っ暗になったことに気づく。すると突風が頭上から吹き付け、芝生が一斉に同じ方向へ倒れる。

「う、うわっ！」

「ぎよええええっ！」

甲高い鳴き声がして頭上を仰ぐと、空から青いドラゴンが下降してきた。って、ええええっ！ ド、ドラゴン？

体長五メートル、翼長十メートルほどのブルードラゴンは、俺の前に重々しい音をさせて着地する。青い鱗が日の光をきらきらと反射して、すごく綺麗だった。

ドラゴンはぎよろりとした目で俺を見つめ、広げていたコウモリのような膜でできた翼を畳む。俺の腕ほどもある長い三本の爪を芝生に突き刺し、ゆっくりと長い首を持ち上げる。

ああ、周りに空いてた穴や糞は全部こいつのだったんだな。

俺は金縛りにあったように身動きが取れない。恐怖もあったが、何よりも驚愕が一番大きい。非現実的なその存在感は、巨乳口リ美少女の膝枕や眉毛のある犬より圧倒的にここが異世界だということを見せてくれる。

「わん」

気がつくともサムネ（犬、怯える俺をドヤ顔で見上げている）が、俺の足に胴体を擦りつけていた。

「ああ、ここはドラゴンの発着場なんです」

シヨコラが満面の笑みで戻ってくる。

「は、発着場？」

つまりこの恐ろしい生き物はこの世界の人間が飼いや慣らしていても乗用しているらしい。ま、まじかよ……俺はドラゴンが今

にもファイヤーブレスとか吐くんじゃないかとドキドキしていた。
「こういう時は急な動きをしちゃいけないんだ。それで、目は合わせない！」

「ドラゴンはとっても大人しい草食動物なのですう、危険なことはないのですう」

シヨコラはそのままドラゴンの前足を撫でる。

「くうくん」

ドラゴンは甘えた声を出し、シヨコラへ鼻先を擦りつける。

「なんだ、めっちゃ安全な生き物じゃねえか。ビビッて損したぜ」

「そうですね、ドラゴンは絶対に人を襲ったりすることはないんですう」

そう言われるとドラゴンにも愛嬌を感じ始める。うんうん、ドヤ顔する眉毛のある犬よりよっぽど安全で可愛いヤツだ。

「この子の名前はベクレルっていうですう」

「名前はめっちゃ危険じゃねえか！」

「あ、プルトニウムも来たですう」

俺は空中で着陸態勢に入った赤いドラゴンを見ながら、軽い目眩を覚えていた。

第4話 王様と王妃様

「ほうほう、そなたがマサムネ殿ですな！」

俺の前では、派手な服を着た恰幅のいいオッサンが満面の笑みを浮かべている。オッサンの名前はラグランジェⅡエンジェルティア。つまりこの国の王様だ。

俺はシヨコラに連れられ、宮殿みたいなドデカイ建物に來た。蔦の絡まる白亜の建物は、年月と威厳を感じさせた。本物のメイドさんが忙しそうに動き回る中を歩き、奥まった広い部屋に通された。シヨコラによれば「謁見室」というらしいが、現代日本風と言えば「応接室」のようなものらしい。シヨコラいわく、「王様とお話しするお部屋ですう」ということだ。

腰まで沈み込むほどふかふかのソファに座って三十分ほども待たされると、王様と王妃様らしい人たちが俺の前に現れた。

王様はニコニコと人の良さそうな笑顔で俺に握手を求めてきたが、王妃様の方は妖艶に微笑んだまま王様の後ろに立っていた。

「つてかすっげえ美人だし！」

派手な服着たメタボ中年にしか見えねえ王様が、よくこんな美女と結婚できたのか不思議でならなかった。

大きなアーモンド型の目には、バツバサ動く黒いつけまつげが翼のように付いている。卵形の顔は愛らしいが、真っ赤に口紅の塗られた肉厚の唇はかなり情熱的な印象を受ける。口元のほくろも色っぽい。

胸は間違いなくGカップ以上はあるだろう。ワインレッドのスパンコールがきらきらするドレスの胸元からは、恐竜の卵みてえな谷間が「こんにちは」している。

きゅっと締まったくびれと豊富な尻。あれに比べたら、シヨコラの膝枕なんて低反発枕だな。もはや何を言っているのか自分でもわからなくなってきた。

とにかく非常に妖艶でフェロモンバリバリな王妃様なんだが、いかんせん歳がいきすぎてる。俺に熟女趣味はねえ。いくら美人でグラマーでも、オバサンはちょっと勘弁だ。

「マサムネ殿？」

オッサ…… もといエンジェルティア王が不思議そうな顔で俺を覗き込んでいた。いかんいかん、集中しないと。

「あ、ああ、すみません」

俺は王様に頭を下げながらも、俺を見ている王妃様の艶っぽい視線が気になってしょうがなかった。

「で、シヨコラが発見したということですか」

いつの間にか王様の話は始まっていたみたいで、俺は前半部分を完全に聞き逃していた。

「は、はあ」

王様は俺のテーブルを挟んで対面にあるソファにでっぷりと座り、丁寧に整えられた口ひげを揺らせている。口を動かすたびにぶるぶるするもんだから、気になってしょうがねえ。

「それで、貴方はどこからいらしたのかしら？」

王妃様が俺から目を放さず、色っぽい声を出す。うほっ、やっぱり見た目通りの声だな！

「えっと、に、日本っす」

「日本？ それはどこにある国ですか？」

「ええっと、たぶんことは違う世界っす」

「違う世界？ 異世界ですか？」

俺にとってはここが異世界なんだけど、まあそういうことなのかな。

とりあえず俺は頷く。

「ふうむ、即座に信じることはできませんがそんなこともあるのかもしれませんな」

「中坊追っかけてたら車に撥ねられて、変なハゲジジイに美少女を

助けたら命を助けてやるってドヤ顔で言われて気づいたらシヨコラに膝枕されてました」

王様と王妃様は啞然として俺を見つめている。入り口の脇に控えている派手な服を着た護衛の兵士らしいヤツが、若干身動きする。

「あ、あ……」

王様は椅子から腰を浮かし、俺の方へ身を乗り出す。な、なんだよ？

「も、もしかして、そのご老人はあの方ではなかったですか？」

王様は俺の後ろを指さす。入ってきた時は気がつかなかったが、俺の後ろの壁には天井に近い位置にあのハゲジジイの肖像画が掛かっていた。妙に偉そうな顔にイラツとした。

「あああゝ！ そう、そうっす！ こいつっす！」

俺は立ち上がってジジイの絵を指さす。

「やはり！ いや、あなたのおっしゃることを信じますぞ！」

王様は興奮して、またもやヒゲをふるふる揺らしている。顔は興奮して真っ赤だ。

「あなたが救世主だったのですな！ いやはや！ 身なりは言い伝えの通りでしたが、このような若い方だとは思ってもありませんでした！ 疑うような質問をしてしまい、失礼しました！」

王様は俺の両手を握って激しく上下させる。

「わたっ、わたたっ！ そ、そうっすか、それはよかったっす。んであのジジイなんなんすか？」

「あの肖像画の方はポニヤックⅡエンジェルティアと言い、わしの三世代前の国王になります」

「な！ んじゃあ、神様じゃねえのかよ！」

あんな現れ方するから、俺はてっきり偉い神様かなんかだと思っちまったぜ。まあ全然偉そうじゃなかったけどよ。それにしてもポニヤックって！ 今度会ったらバカにしてやろう。

「いやいや！ ポニヤック王はこの国開闢以来の大魔法使い様でした。特に召喚魔法においては、まさに神の領域に達しておられた

方だと聞いております」

「あのハゲジジイがあ？」

召喚魔法とやらが何のことか知らねえが、俺をこんな世界に連れて来るぐらいだからまあ確かに変な力はあるんだろうな。まああんなジジイのことはどうでもいい。それより美少女だ。

「そんで俺が救い出す美少女って、どこに囚われてんすか？」

「囚われる？」

王様の動きが止まる。王妃様の微笑が消え、眉間に若干シワが寄る。ちよ、その顔まじで怖えっすよオバサン。

「姫は囚われてなどおりませんぞ？」

「へ？」

その時部屋の扉が勢いよく開かれ、金髪碧眼の絶世の美少女が入って来る。その後ろでは、扉にノックダウンされた兵士が目を回して倒れていた。

第5話 伝説の始まり

「お父様！」

美少女は切れ長の目をさらに吊り上げ、細い肩を怒らせてずかずかと足音を立てて突き進んでくる。どうやら何かはかなり腹を立てているようだ。

「あの男はなんなんですか？ 『君は宝石のように美しい』だなんて！ わたくしを鉱物資源に例えるなんて、デリカシーがないにも程がありますわ！」

「こ、これ、レオナ！ お客様がいらっしやってるのにいきなり失礼ではないか」

王様は慌てて立ち上がる。

お父様ってことは…… まさかこの美少女が王女様？ あれ、何でここにいった？

レオナと呼ばれたその美少女は、俺の方をちらっと見ると「フンッ！」と鼻を鳴らす。

「こんな小汚い男が客だなんて、お父様もお暇なのね！ とにかくあの男はさつさと首にしてください、いえ、首では生ぬるいわ。一族郎党皆殺しよ！」

「まあまあレオナ、話をしよう。マサムネ殿、すまぬがこの後の話はフィオーナに聞いてください」

呆然と立ち尽くす俺を置いて、王様は頭から湯気を出していそうな王女の肩を抱いて部屋を出て行ってしまふ。扉が閉まると後に残されたのは俺と王妃様、そして気を失ったままの兵士だけだった。

「ふう、びっくりなされたでしょう？ とにかくまあお座りになつて」

「は、はあ」

「誰か！」

王妃様はテーブルの上にあった小さな鐘を鳴らす。カランカラン

と小気味良い音を立てると、奥の小さな扉からメイドさんが出てくる。一瞬シヨコラかと思っただが、違う女の子だった。

「お茶をここへ。ああ、あと侍医を呼んで、ラオスがまたノックアウトされたわ」

「畏まりました」

ショートカットの黒髪をしたメイドさんは、丁寧にお辞儀をして足音をさせずに出て行く。王妃様は振り返ると、微笑みながら俺を見る。

「ごめんなさいねえ、いつものことなのよ」

「あ、あの、話が見えないんですけど……」

「そうですね。お茶を飲みながらゆっくりお話しますわ」

「は、はあ」

もう俺は「は、はあ」しか言えない人形になった気分だ。

王女は確かに美少女だったが、魔王とかに囚われてるわけじゃなかった。それどころかめつちゃわがまま娘のようだ。いくら美少女でもあれは勘弁だな。よほどDM趣味じゃない限り、あの性格じゃ精神ズタボロにされちまう。

メイドさんがピカピカに磨き抜かれたワゴンを押して部屋に入ってくる。俺と王妃様はメイドさんがお茶を淹れ終わるまで黙って座っていたが、メイドさんが一礼して部屋を出て行くと王妃様は改めて口を開く。

「さて、申し遅れましたがわたしはこの国の王妃、ファイーナ＝エソジェルティアと申します」

「は、はあ」

俺はぎこちなく座ったままお辞儀する。この国の王妃様なんて偉い人なんだから、本当は立ってお辞儀しなきゃなんないだろう。でも俺はこの国の国民じゃない。いや、この世界の人間ですらない。なので王様が言ってたように、あくまでもお客さんとして対応すべきんだらうな。とりあえず。

「まずは、王がおっしゃっていた『救世主』についてです」

「は、はあ」

「この国は非常に危険な状況に追い込まれています」

「は、はあ…… って、はあ？」

おし！ ようやく話が進んできたぞ。

「あれっすか？ 悪い魔法使いに滅ぼされようとしているとか、強いドラゴンが暴れまくってるとか」

「いえ、我が国はそういう意味では非常に平和、平穩無事でありますわ」

「あれ？」

俺はがつくりする。んじやなんだってんだよ。

「危険な状況というのは、わたしの娘…… レオナです」

「は、はあ」

やっぱりこれしか出ねえな。俺は目の前で湯気を立てる上手そうな紅茶らしき飲み物を一口飲む。

「熱っ！」

「ご覧の通りとても…… いえ非常にわがままでじゃじゃ馬でおてんばです」

「はあ、そんな感じっすね」

「遅くに授かった一人娘で、わたしも王もレオナを目の中に入れても痛くないほどかわいがって育ててきました」

「いや目ん中入れたら痛いつすよ、普通」

「おだまり」

「はい」

ひえっ、一瞬空気が凍ったぞ？ このオバサンには冗談通じねえんだな、よく覚えておこう。

「それで成人するに当たって、王は社交界や政財界へ出ても恥ずかしくないように教育を施すことにしました」

「いわゆる家庭教師っすか？」

「最初は…… そうでした。しかしそれも一週間経たずにすべて辞めてしまいました」

「それは…… 辞めさせられたってことっすね」

王妃様は頷く。まああの調子じゃ相当わがまま言っただらうな。ご愁傷様だな。

「ところがレオナのわがままはわたしが思った以上でした」

王妃様は綺麗に整えられた眉根を寄せる。それが妙に艶めかしくて、俺はこっそり生唾を飲み込む。

「家庭教師に留まらず、身の回りの世話をする侍女たちにも当たり散らすようになったのです」

「はあ、あれっすね。八つ当たり」

王妃様は少し首を捻るが、小さく頷く。

「まあそんなところでしよう。家庭教師たちのやり方にも問題はあったのでしようが、レオナのストレスはかなり大きいのです」

「ストレス…… っすか」

まあそれは俺もよくわかる。それで大暴れしちゃったしな。

俺はその時初めてあの美少女王女に同情した。

「今では王女の身の回りの世話はシヨコ一人。護衛でさえ女性の剣士一人しか認めません」

「後はみんなこれっすか？」

俺は手を首に当てて横に引く。つまり「クビ」って意味だ。

王妃様は頷くのとため息をつくのを同時に行う。白く巨大な谷間がふるふると揺れ、俺の目はそこに釘付けになってしまふ。

「我が王家にはポニヤック王の予言があるのです」

「予言…… っすか」

王妃は俺を潤んだ瞳でまっすぐと見つめる。ちょっと恥ずかしくなっちまって、俺は若干視線を逸らす。

「『王女を立派な淑女として成人させないと、この国はいずれ滅びるのである』…… と。そして『マサムネという名の神官のような

黒衣を着た異世界からの男が、この国を救うだろっ』とも」

「えええっ？」

あのジジイ、俺をこの世界に送ったのはそういうことだったんだ

な！

変な力のあるあのハゲジジイのことだ。俺を送り込んだ後に、予言とやらを時間を前後させて変えるなんて朝飯前だろう。つまり俺をこの世界に送ることを決めた時、あいつは過去の予言を変えやがったんだな！俺にはジジイが舌を出す光景が目に見えるようだった。

「予言は言い伝えとなって代々受け継がれてきました。あなたが予言通りの救世主ならお願いします。あの娘の執事となってこの国を救ってください！」

「どええっ？」

こうして俺の『最強執事』伝説が始まった。

第6話 王女レオナⅡエンジェルティア

「レオナ様、お夕食の時間でございます」

俺は腰を四十五度の角度で曲げて、深々とお辞儀する。

「要らないわ、食べたくないの」

俺の前には豪華な金髪を波立たせた絶世の美少女が、つんとそっぽを向いている。彼女はレオナⅡエンジェルティア。このエンジェルティア王国という異世界の国の正統な王女だ。国王には正統な世継ぎがおらず、一人娘のレオナがそのまま成人すれば女王としてのこの国の頂点に立つことになる。

「そうおっしゃらず、ぜひお出でください。国王様も王妃様も、レオナ様と夕食を共になされることを楽しみにしておりますよ」

「うるさいわね！ 要らないっいたら要らないのよ！」

レオナは豪華な一人がけソファの肘掛けを強く叩くと、立ち上がってテラスへ通じる大きな窓際へと歩いて行ってしまふ。

ちっ、ムカつく。でもここは我慢、我慢。

俺はこのわがまま王女の執事としてこのお屋敷で働き始めた。この二日間というもの、この娘には翻弄されっぱなしだ。

元々執事なんてやったこともない不良学生の俺が、見よう見まねでやっても上手くいくはずはない。

執事…… 高位の家で家政や事務を執りしきる者。

俺はアンネラというメイド長に、一通りの仕事についてレクチャーを受けただけだ。とりあえず見た目だけはそれっぽくなった。

仕立てのいい生地のスーツにレース装飾のついた白いワイシャツ。清潔な靴下と磨き抜かれて黒光りする革靴。執事以外じゃホストにしか見えねえ。

俺に与えられた役割は、執事本来の仕事とは大きくかけ離れていた。

王女様を淑女にすること、物わがりのいい素直な女の子にすること。

と。ただそれだけ。

本来なら国政に関わる事務仕事なんかもあるらしいが、そういうのはお屋敷の専門的な事務方がやってくれる。

身の回りの世話は女性のレオナには女性の侍女がつく。それがシヨコラだ。男の俺は侍女にはなれない。そうなると正式に教育係としてレオナに納得させるためには、執事という身分しかなかったのだ。

勉強が苦手な俺としては、余計な仕事がないってことはありがたかった。だがレオナを淑女にするって仕事は、執事本来の仕事より遥かに難しいことだと身に染みてわかった。

そう、まさに身に染みて。

俺は王女から数メートル下がった位置で、なおも食い下がる。今日こそは何か一つでもいうことを聞かせたい。

「レオナ様、今日はレオナ様の好物である魚介類のパスタが出されるそうですよ？」

レオナは一瞬形のいい眉毛をぴくりと動かす。しかし一秒後には「フンッ！」しか返って来ない。

俺は心の中でドナドナを歌いながら、沸騰しそうになる頭を冷やす。

怒っちゃダメだ、怒っちゃダメだ。可哀想な小牛の目を想像しろ！ 涙を浮かべてふるふる小さな体を震わせて、荷馬車で送られていくんだぞ？ 売られちゃうんだぞ？ 哀しいよな？ 切ないよな？ だったらその程度で怒んじゃねえよ、俺。

「だいたいあんたは何にもできないくせに、なんで執事なんかやってるのよ！ 粗野で乱暴で変態で人外で野獣でオークでトロールな変態よ！」

「レオナ様、『変態』が二度入っておりますよ？」
「フンッ！」

俺はこめかみをピクピク痙攣させ、口角を震わせながら何でもないことのような表情を取り繕う。本当は今にもキレそうだったんだ

が。

柔らかな布に包まれた豊かな胸が、荒い鼻息に合わせてぷるんと揺れる。シヨコラほどではないが、レオナの胸も巨乳と言っていいくらいでかい。いやレオナの場合美巨乳か。性格同様つんと上を向いた双丘の頂は、服の上からでも居丈高だ。

レオナは白いレース地の内着に、レモン色のフリフリのロングドレスを着ている。手には肘まである白い絹の長い手袋を嵌めていて、直に物に触れることはない。

こういふ少女漫画に出てくるような王女様は普通くるくるパーマでドリルもみあげだったりするのだが、レオナの髪はストレートで背中の中ほどまで長い。うなじのうしろでデカイ宝石をまぶした髪留めで一つに纏め、残りは馬の尻尾のように自然に垂らしている。朝晩とシヨコラに二時間近く手入れさせている自慢の金髪だ。

見た目は完璧にセレブ美少女。しかし中身は超絶わがまま娘だ。アキバあたりに行けばそういう王女様のヒールに踏まれて喜ぶ輩もいるだろうが、残念ながら硬派な不良を自認している俺にはそんなDM趣味はない。罵倒されて恍惚になれる変態ではないのだ……たぶん。

「あなたはブタよ、家畜よ、フンよ。生きる価値もないわ。だから今すぐここから出て行きなさい。いいえ、むしろ死んで」

「レ、レオナ様、そ、それは少し言い過ぎでは？ フンに至っては生物ですらありません。排泄物です、もはや死ねません」

「だったら畑の肥料になるなりすればいいわ！ その方がよっぽど世の中の役に立つわよ、この腐れ外道！」

俺は頭の中で何かがぶち切れた音が聞こえた。

「がああっ！ 黙って聞いてりやこのクソアマ！ 言うに事欠いて腐れ外道だのフンだの、もう許せねえ！」

「フンッ！ ほら、そうやってまた本性を現したわね、野獣！ 許せないって、いったいどうするつもり？」

「力づくで言うこと聞かせてやるあー！」

俺は腕まくりしてレオナに近づく。するとレオナは右手を俺の方へすつと伸ばし、手のひらを向ける。

「マンティコア！」

「やべっ！」

ブチキれていた俺は我に返って踵を返す。またやつちまった！

俺の視界の端には、レオナの手のひらの真ん中に光るエメラルドグリーンの光が見えた。

次の瞬間、俺は巨大な獣の足で床に踏みつけられる。

「ふぎゃ！」

「ぐわおおおっ！」

俺を踏みつけていたのは体長三メートルはありそうな人面ライオン。尻尾はトゲトゲのハンマーみたいになっている。

レオナはなんと召喚魔法の使い手だった。ハゲジジイの劣性遺伝子がそうさせるのか、その能力はこの世界でもトップクラスだという。どおりで今まで誰も言うことを聞かせられなかったってわけだ。俺はレオナの執事になってから、毎回神獣やら幻獣やらの餌食にされていた。

「マンティコア、やっておしまい！」

「ぐわおおおっ！」

「ぎゃあああっ！」

俺はケツに食い込むモンスターの牙に意識が遠のくのを感じる。

「さ、魚介類のパスタをいただきますよ」

俺はカツカツとリズムカルにヒールを鳴らして歩いていくレオナの後ろ姿を見送りながら、伸ばした右手が力なく落ちるのを見た。

「もういつそ殺してくれ……」

「ぐわおおおっ！」

「ぎゃあ！」

レオナの颯爽とした後ろ姿は、そのまま無情にも閉じられたドアの向こうに消えていった。

第7話 エルザ＝アマンディア

「あああつ！ もうやってらんねえ！」

俺は濃紺の空に瞬き始めた星空を見ながら、大きくため息をつく。だいたいあのわがまま娘をどうにかしようつてのが間違いだ。ああいう女は一度痛い目を見ねえとわかんねえんだ。自分がどれだけ恵まれた環境にいて、周囲に守られて生きていられるのかつて。

俺はふと元の世界を思い出す。あそこは最悪のクソみてえな世界だった。俺には居場所がなかった。成績とか世間体とか、そういうもんばかりに価値を置くクソ親ども。いつも冷たい視線で俺を見下すクソ教師ども。ロボットみてえに親の言いなりになってる優等生の兄貴。どいつもこいつもカスだ。

「あ、見つけたですう」

入り口からシヨコラが顔を出す。この屋上は俺のお気に入りだ。タバコがあれば最高なんだが、どうもこの世界にはタバコはないらしい。学校の屋上が懐かしいぜ。

シヨコラはスカートのフリルをふわふわさせながら歩いてきて、俺の隣へ腰掛ける。

「おい、仕事はいいのか？ 今レオナは飯食ってんだろ？」

「お食事中は給仕さんたちがいるからいいんですう。レオナ様のお食事が終わるまで、自由時間なんですう」

そう、レオナ専属のシヨコラに個人で自由に使える時間は非常に少ない。一日三食の食事時と寝てる時くらいだろう。俺を見つけた時は、レオナに花を摘んでくるように言いつけられていたらしい。そんな時でないと外出さえままならない。まさにレオナのために生きてるようなもんだ。

「お前は飯食ったのかよ」

「うちは今ダイエット中ですう」

シヨコラはニコニコして頬に手を当てる。シヨコラは巨乳だが、

全体的には幼児体型だ。でもそれは太ってるってわけじゃない。まあ「脱いだらすごい」のかも知れないが。

「なあ、お前腹立たないのかよ。あんなわがまま娘に付き添って」「レオナ様はとて純粋でかわいらしい方ですう。みんな誤解してるのですう」

「誤解ねえ……」

俺はため息をついて夜空を見上げる。こうして仰向けになって寝転んでいると、宇宙に吸い込まれちまうような気がする。昔から星は好きだった。

「レオナ様はお寂しいんですう。国王さまも王妃様もお忙しくてえ、昔から遊び相手もいらっしやらないしい」

「遊び相手ねえ」

俺はあいつの玩具なのかもしれねえな。

「だから魔法でえ、いろいろな獣を呼び出して遊ばれてたんですう」

「あの化け物どもは、あいつの遊び相手かよ。すげえな」

今もまだケツが痛え。お陰で腹も減らねえし。

「でも最近のレオナ様は楽しそうですう」

シヨコラはニコニコして俺を見ている。あー、あれだ。俺という玩具が手に入ったからだな。

「こっちはお陰で生傷だらけだっつーの！」

「マサムネさんはあ、今までの執事さんと違って我慢強いですう」

「はっ！ あんなんされたら、普通は逃げ出すわな！」

俺は逃げたくても逃げられない。ただそれだけのことだ。なにせミミズとかオケラにはなりたくねえしな。

「で、お前は何の用で俺を捜してたんだ？」

「あ、そうですう。エルザさんが捜してたですう」

「げっ！ あの女が？」

エルザとはエルザ・アマンディアといい、レオナ専属護衛の女剣士だ。身長は百八十センチ近くあり、褐色の肌に筋肉ムキムキのマツチョウマンだ。何でも南方の国からわざわざこの国に出仕を申

し出てきたらしく、その腕前は滅法強い。おそらくレオナの召喚獣ともいい勝負ができるだろう。

俺はあの女が苦手だ。

「やべっ！ ショコラ、ここに俺がいること黙っててくれよな！」
「うーん…… でも見つけてしまったしい、うちは嘘つくのはイヤですう」

「後でお礼するから！ な？」

「うーん……」

ショコラは口を尖らせて唸っている。俺はショコラの気を逸らすことにした。

「そ、そういえばショコラってフルネーム聞いてなかったよな。俺当ててみようか？」

「ええ？ わかるんですかあ？」

案の定ショコラはのってきた。俺はショコラのフルネームは知らないが、適当に言えば気も逸れるだろう。

「ショコラ＝デニッシュ！」

うは、超テキトー！ でも好きだからいいや。

ところがショコラは目と口をOの字にして動きを止めている。

「な、なんでわかったんですかあ？ 誰かに聞いたんですかあ？」

ぐはっ！ 当てちまったよ！ ってか、名前までお菓子系かよ。

「ああっ！ いた！」

入り口からぬうつと大きな影が現れる。俺はそれが誰なのか一発でわかった。

「お前、仕事さぼってそこで何やってんだよ！」

蛍光灯のような明るい月明かりの下、燃え立つような金髪と青い瞳。黄金の鎧に身を固め腰には長剣を下げている大柄な女剣士。

「げっ！ エ、エルザ！」

エルザは入り口を塞ぐように腕組みをして俺を睨みつけている。

逃げ道はあそこしかない。それがわかってそこに仁王立ちしているのだろう。

「レオナ様が食事を終えられるまでに、本を部屋に運んでおけつて言われたらう？ オレだけにやらせる気がよ！」

エルザは見た目にそぐわず言葉遣いは男っぽく、自分のことを「オレ」と言う。それが妙に似合つてて男前だから困る。

「ま、まだ時間あるだろ？ あいつはさっき飯食いに行ったばかりだぞ？」

「なんでも食事が口に合わなかったとかで、もう部屋にお戻りになつてるんだよ！ 本がないつてご立腹だ！」

「くそつ、あんのクソアマ」

俺は立ち上がつて後ろ頭を掻きながらエルザの方へ向かう。エルザはムツとした表情で俺に道を譲つたが、すれ違いざま俺の股間が驚掴みされる。

「うごっ！」

「それと、レオナ様に対する口の利き方に気をつけるんだな。オレの目の黒いうちは、レオナ様に対する暴言は許さねえからな」

エルザは大きな手で俺の股間を強烈な握力で握りつぶそうとする。

「うげっ、わ、わかった！ わかつたつて！ うがあ！」

エルザはにやつと笑つて俺の耳に口を寄せる。こんな野蛮な女でも、近づくといいい匂いがする。

「レオナ様に手を出したらオレが許さねえからな。もしどうしても我慢できねえなら、オレがいつでも相手してやるぜ。カラツカラになるまで搾り取つてやるからな」

手！ 手を動かすな！ あ、ああ……

俺にMっ気はなかつたはずだ。しかしエルザの手技はハンパない。抵抗する気力そのものが萎えてしまう。

「あああ、エルザさんだめですう！ マサムネさんをいじめては、うちが怒るのですう！」

俺とエルザの周りを、シヨコラが腕をわにわに動かしながら走り回る。

「その割りには反応してるぞ？ おらっ、うりうりうりいいいい

い
〜!
「

」
じぎやああっ、ふじじっ
「……………」

俺は遠くなる意識の向こうに、栗色の花畑を見た。

第8話 フィオーナのお願

「よっこいしょっと！」

我ながらオヤジ臭えと思いつつも、声を出さずにはいられない。エルザに悶絶させられた後大量の本（しかも全部ハードカバー）を運ばされ、腰がめりめり言っている。体力にはそこそこ自信はあるが、もともとやる気がないだけに疲労は二倍だ。

しかし、どうしたもんか。あのわがまま娘を淑女にするなんて、絶対無理だと思えない。さつきだつて頭三つある犬の化け物……ケルなんとかつてヤツに追い立てられたし。お陰でエントランスと三階にあるレオナの部屋を何往復も走つて運ばされた。

「くっそ！」

俺は風呂上がりの濡れた髪を、わしゃわしゃとかき乱す。こういう時マンガとかテレビがあれば気を紛らわすことができる。ケータイでもいい。アプリとかやってれば、少しは嫌なことを忘れられる。でもこの世界にはそんなものはない。せいぜい小難しい本くらいだ。俺は絵のない本は大っ嫌いだ。一ページ目で寝られる自信がある。

だからこうなるともう寝るしかすることがない。

「はあ、明日は数学の家庭教師が来るんだっけな……」

レオナが暴走しないように、その間付き添ってないといけない。

お茶やお菓子を出したりつて仕事もあるし。

「ふあ……」

慣れない執事生活のためか、最近ベッドに横になるとすぐに眠気が襲う。宵っ張りだった俺も健康的になったもんだ。

俺の部屋はメイドや執事などが使う使用人用の部屋だ。両隣は国王付きの執事と秘書官。どっちも中年というには若く、青年というには歳を取っている。三十くらいか？ はっきり言つて話をしたこともない。するヒマもねえし。

忙しいのか、どちらも部屋に戻るのは遅い。遠くでドアの閉まる音を聞きながら、俺は夢の世界へ堕ちていった。

むに。

「ん……」

むにむに？

ん、なんだ？ 何か柔らかいものが俺の顔に……

むにゆうつ！

「うわっ！」

俺は起きあがろうとして巨大な柔らかい物体に押さえつけられる。同時に香水らしいいい匂いが鼻孔を満たし、息も苦しくなる。

「あら、起きてしまわれたんですね？」

こ、この声は……

懸命にずり上がってその巨大な柔らかい物体から頭を出すと、そこにいたのはあの妖艶な王妃フィオーナだった。ってことは俺を窒息させようとしているこの物体は……

「あん、マサムネさまの吐息がくすぐったいですわ」

ち、乳か！ 押しのけようとした俺の手が空中で止まる。触ったら大問題だ。いや、思いつきり顔が埋まってるけど。

「な、なんすか？」

「あああ、こんな夜中に殿方の部屋に来た理由を女に聞くななんて野暮ですことよ？」

フィオーナは艶めかしく赤いルージュの引かれた口角を持ち上げる。俺の防衛本能が「喰われる」警告を発している。健康な男子高校生であるからには女に興味がないわけではない、いや、正直興味津々だ。右手以外の彼女ができたことは今までないが、それ相応の知識はある。

それでも王妃なんて立場でしかも熟女は俺の守備範囲外だ。いか

に美人でいい身体をしていたって、人妻に手を出すほど飢えちゃいねえ。

「ま、ま、待つてください。は、はな、話せばわかります!」

「あらあ? 何か素敵な夜伽話でもしてくださいのかしら? ふふ、雰囲気を盛り上げるのにはいいわね」

そういうとフィオーナは漸く俺の上から豊満な身体をどかしてくれた。

フィオーナはシースルーのナイトドレスを身に着けており、その下の黒い下着が丸見えだ。エンジ色の裾の長い上掛けを羽織っているが、前面をがばつと開けているために何も隠せていない。

俺はごくりと唾を飲み込み、何を話そうかと思案を巡らす。

「お、王妃様はレ、レオナをどう思ってるんすか?」

「レオナ?」

フィオーナはきよとんとして忙しく瞬きを繰り返す。いきなり娘のことを持ち出されるとは、思ってもみなかったんだろう。よし、何とか気を紛らわせることができたぞ。

「あの娘には不憫な思いをさせて済まないと思ってるわ。本当は優しい娘なのに」

フィオーナはシヨコラと同じことを言う。俺には、どうもそのレオナに対するその評価が解せない。

「優しいいい娘っすか……俺にはとてもそんな風には思えないんすけど」

「あの娘のわがままは、甘えの裏返しなんです。そこはわかってあげてくださいね」

「裏返しねえ」

俺が死ぬ前にわかってあげられればいいがな。

「あ、そうそう、いいこと教えてあげるわ。あの娘、腐女子なのよ」「はあ?」

今度は俺がきよとんとする番だった。腐女子って聞いたことあるぞ? 確かホモとか同性愛とかが好きなオタク女のことだろ? あ

れ、違うか？　つてか、何でこの世界にそんな言葉があるんだ？

「BL小説とか漫画とかあの娘の部屋にたくさんあったの見た？」

俺は激しく首を横に振る。あいつの物に触れただけで、俺のケツは三つにも四つにも割れちまうぜ。

「あなたがさつき運んでた本。あれ全部BL物よ」

「ところでBLってなんすか？」

フィオーナは大きくため息をつく。

「そこから説明しなきゃならないのね。BLはボーイズラブの略で、男の子同士の恋愛をテーマにした創作物のことよ」

「ぶっ！　ホ、ホモっすか？」

「そう言っちゃうと身も蓋もないけれど、まあ似たようなもんね」

「わっけわかんねえ」

「あ、でも勘違いしないでね。そういうのが好きってだけで、男の子に興味がないわけじゃないから」

「でもなあ……」

俺にははつきり言って理解できない分野だ。別に他人の趣味にとやかく口を出すつもりはないが、いっしょに楽しむことはできない。「そうそう、実は今夜はあなたにそのことをお願いがあつて来たのよ」

「お願い？」

フィオーナはニコニコしながら頷く。

「どうやらそれが本来の目的で、俺に夜這いをするつもりはなかったよ。……たぶん。」

フィオーナのお願いというのは、確かにレオナに振り回される俺にとっては一つの転機になりそうな話だった。俺はフィオーナのお願いを快諾し、形のいい尻がドアの向こうに消えるのを安堵と未練半々の気持ちで見送ったのだった。

第9話 マーケットと傭兵国家

「その野獣」

「レオナ様、できれば名前で呼んでいただきたいのですが」

「あらそう、ではヒポタマス」

「レオナ様、それは人間の名前ではありません」

「じゃあ、略してヒポタマ」

「いえ、なぜ略すのかわかりません」

今日のレオナはどうやら機嫌がいい。その理由はわかっていた。

母親である王妃フィオーナから俺にお願いされた件だ。

「で、私わたくしになんのご用でございますか？」

「ヒポタマのくせに人語を解するあなたの意見も聞きたくて。お出かけにはどれを着て行つたらいいかしら」

「そうですね、この薄緑色のロングドレスなどがでしょうか」

「これね。ではこれは捨てましょう」

「んな？」

レオナはそのドレスを丸めてポイする。ムカツ！ いかんいかん、せっかく機嫌がいいのにここで俺がキレたらぶち壊した。

フィオーナのお願いと、レオナを隣国のマーケットに連れて行ってほしいということだった。マーケットとは市場のことだが、今回のマーケットとはどうやら世界各国から集められた本の展示即売会だという。俺の元いた世界の言葉でいうところの「コミケ」ってヤツだ。

レオナの好きなB本やシヨタコン本は、普通の書店では売ってはいない。もともとの世界では、書店自体ない。国営の図書館のような施設はあるらしいが、当然“お堅い”本しか置いてない。

先日大量に持ち込まれたB本は、どうやら隣国のレオナの友人が送ってきてくれたものらしい。

つまりレオナにとって今回のこのマーケットは、自分の欲しい本

を自分で欲しいだけ選べて買えるまさに夢のような機会なのだ。

俺はレオナの引率兼護衛をフィオーナにお願いされた。当然シヨコラとエルザも同行するが、女ばかりでは不安だということ、ラグランジエ王が渋っていたらしい。しかし俺が付いていくということ、晴れて外出の許可が下りたのだ。

お陰でこの始末だ。

「ヒポ」

「レオナ様、省略し過ぎです。もはや跡形もありません」
「靴はどれがいいでしょう？」

レオナの前には高いヒールの靴からパンプスと言っていていいような靴まで、十以上並べられている。

マーケットと言ってもいわゆるコミケ。俺はオタクではないから、コミケなんつーものに行ったことはねえ。何となくテレビとかで見知っただけだ。

でも広い場所で大くさんのブースがあって、様々な物が売られているというイメージがある。そうなれば歩きやすい靴、動きやすい服装の方がいいだろう。

それに例の噂がある。

「高いヒールの靴は止めた方がいいでしょう。おそらくたくさん歩くでしょうから」

「あら、タマのくせに割とまともなことをほざくのね。不愉快だわ」
「レオナ様、それはすでに猫の名前です」

「不愉快」といつつ、顔は本当に楽しそう。身体にまとわりつく音符が見えそう。何の曲かわからないが楽しげに鼻歌を歌いながら靴を選ぶその横顔は、十六歳という年相応のかわいい女の子そのものだった。とても普段高慢ちきな態度と行動で、周囲にわがままを振りまく王女様には見えない。

その噂を最初に聞きつけたのはエルザだった。

エルザはもともと南の方の国出身ということで、国外にも知り合いは多いらしい。エンジェルティアに来る前の話はあまりしたがら

ないが、顔の広さでは国王にも負けないほどのようだ。

そのエルザの情報網に、不穏な噂が引っかけた。

エンジェルティアはとても平和な国で、ここ何百年も戦争や内紛など起こったことはないらしい。築城の文化がないのはそのためだ。もちろん山賊や強盗団などの犯罪者はあるが、王様のいるこの館の周囲は広大な山や野原だ。その空間自体が防壁となる。過去、このお館に侵入しようとして成功した盗賊はいない。

ドラゴンを始めとした数々のモンスターの餌食になってしまいうからだ。

このお館の周りの土地には、野生の猛獣やモンスターが放たれているらしい。俺が見つかった野原はまだ安全な場所だが、あそこから見えた森の中には凶暴なモンスターや獣がうようよいたようだ。俺は後でそれを聞いた時、かなりビビッた。

そういう事情もあってこの国はそこそこ平和な国なのだが、周囲の国はそうではないようだ。

マーケットが開催されるのは隣国「オバマ」。どこの大統領だと思っただが、本気でそういう名前の国らしい。オバマとエンジェルティアは細い海で隔たっており、両国の行き来は船でしかできない。

それが幸いしてエンジェルティアは平和なのだが、このオバマという国が非常に物騒な国のようなのだ。

「ねえバカ、上着はどっちがいい？」

「レオナ様、逆になっていきます。せめて動物の名前にしてください」

「ほほほ、幽霊の正体見たり枯れ尾花」

「なんでそんなこと知ってんすか」

オバマは強力な傭兵によって国を支えている「傭兵国家」だった。そしてレオナがマーケットに行くという噂をどこから聞きつけ、誘拐を画策している一団がいるらしいというのだ。

エルザは先にオバマへ旅立ち、情報収集をしている。俺とシヨコは明日レオナといっしょに出発し、向こうでエルザと合流することになっている。

「ねえタ」

「今度は魚介類ですか」

俺はその噂がガセネタであることを祈っていた。

第10話 大空へ

「ベクレルう！」

シヨコラが両手を広げて空を見上げる。青いウロコをきらめかせながら、ブルードラゴンがグライダーのように滑空する。これどう見ても特撮かCGでしかあり得ない光景なんだが、すでに慣れつつある自分が怖い。

本日は快晴、気温は暑くもなく寒くもない絶好のお出かけ日和。俺は荷物の詰まったリュックを背負い直し、斜面の下方を見る。ここではレッドドラゴンのプルトニウムがレオナとじゃれている。どうでもいいが、こいつらの名前どうにかなんねえかな。

「マサムネ！」

俺の心臓が跳ね上がる。レオナが嬉しそうに、本当に嬉しそうに優しく俺の名前を呼んだ。レオナの執事になって初めて名前を呼ばれた。それだけ。たったそれだけなのに、俺はドキドキして頬が緩むのを感じた。

「んん、こ、こほん！ な、なんですかレオナ様」

「マサムネ！」

「わん（キリッ）」

ぶっ、犬（眉毛付き）の方がよ！ レオナは足下で腰を振るマサムネ（犬）の前足を抱き上げ、鼻面に頬ずりしている。俺はがっくりと肩を落とす。

「わんわん（キリックスッ）」

「ああ〜！ また笑いやがったあのクソ犬！」

俺は腕まくりをして、マサムネ（犬、いまだに腰を振っている）に向かってずんずんと歩き出す。

「ああ〜、マサムネさん！」

シヨコラが背後から声を掛けてくる。うっせ！ 俺はもう我慢ならねえ。あのクソ犬に、人間様の恐ろしさをたっぷりと教育してや

らねえと。

どうせ出発したら二、三日は戻って来られねえ。躰はタイミングが大事ってね！

直後、俺の上に巨大な何かのしかかってきた。

「ぐわあゝ！」

俺は堪らず地面に押し倒される。硬い何か俺を地面に押さえつける。

「ベクレルう、マサムネさんを下敷きにしてるよお！」

どうやら俺はベクレルの着地点を横切っていたようだ。ベクレルの赤いウロコは、鉄板のように硬いのになにに温かい。

「むぎゆう……ど、どけ……むぎゆう！」

俺の顔は押しつけられるウロコで奇妙に歪んでいく。

「ほほほ、ベクレル。そのまま脱糞してしまいなさい」

「にゃ、にゃめよ！（や、やめる！）」

俺の頭の上で、レオナの高笑いが聞こえる。俺は必死に両手を動かそうとするが、ベクレルの巨体でまったく動かすことができない。つてか、王女が脱糞とか言うな！

「わん！」

するとマサムネ（犬、表情は見えない）が一声吠える。すると俺の上に掛かっていた重さが消える。ベクレルが身体を持ち上げたらしい。俺の言うことは聞かねえくせに、犬のいうことは聞くのかよ！

「くっそ、このクソドラゴン！ちゃんと安全確認しやがれっただ！」

「わんわん！（メツ！）」

マサムネ（犬、逞しい眉根にシワを寄せている）が、俺を窺めるように吠える。

「あはは！犬にまで叱られていますわ、このド畜生以下の下等生物は」

「ムカツ！」

俺はマサムネ（犬、キリリと眉を持ち上げている。ちょっと凜々

しいか思ってしまったのは内緒」と睨み合う。

「お待たせしたね」

そこに王様と王妃様が、護衛の兵士たち五人ばかりに囲まれて現れる。

「お父様！ この度はお出かけを許可してくださいまして、本当にありがとうございます！」

レオナは駆けて行って、ラグランジェ王の首に抱きつく。いいなあ、あれ。

「おうおう。レオナ、気をつけて行っておいで。オバマのレンドルフ公爵には、くれぐれもよろしくお願いしてあるからね」

「はい！」

レオナは満面の笑みで頷く。

今日のレオナは、今までと一風変わった出で立ちをしている。レモン色のブラウスにエンジ色のボレロ。膝上五センチくらいの白いミニスカートに、雪のように真っ白いロングブーツ。横には同じく白いボンボンが二個ずつ揺れている。ストレートロングの金髪は縛らずに流しているが、真っ赤なカチューシャをしてはられないようにしている。あれはどう見てもキューティハ…… ごほんごほん。

とにかく活動的なのは言うまでもない。俺は目の前でちらつくレオナの白い太ももをチラ見しながら、王妃様の方へ近づく。

「王妃様。例の件、エルザから何か連絡はありましたか？」

レオナに聞こえないように、小声で聞く。フィオーナ王妃は形のいい眉根をほんの少しだけ寄せて、小さく首を横に振る。

「とりあえず、大規模な盗賊や強盗団の動きはマークさせています。でも個人や少人数で動く傭兵の動きは皆目見当もつきません。後はあなたとエルザに頼るしかありません」

「ま、ガセだと思えますけどね」

王妃は俺の言葉に苦笑して、視線を逸らす。レオナが近寄ってきたのだ。

「こら外道、お母様に近づくんじゃないわよ！」

「レオナ、そんな言葉遣いはおよしなさい。今回お出かけできるようになったのは、マサムネさんのお陰なんですから」

「わん！（得意げにキリッ）」

「お前じゃねえ！」

「は、はい。でも……」

レオナは俺を不審な目で見る。どうでもいいが、美少女ってのはどんな表情しても綺麗なんだよな。きつと、鼻くそほじっても綺麗に違いない。

「なあに？ 何か不安でもあるの？」

「この野獣のような野蛮な男に、わたくし変なことされたりしないか心配なのです」

「んなっ！」

「おゝほっほっほ！ 心配しないでいいわよ。その辺はエルザとシヨコラが、しっかりと見張っていますから」

「はいですう〜！ お任せくださいですう！ マサムネさんがレオナ様に何かしようとしたら、うちがちょんぎっちゃうですう〜！」

「な、なにを？ 何をちょんぎっちゃうの？」

俺は下腹部に危険を感じた。

「では道中気流が激しいところもあるだろうから、振り落とされなないようにな。ま、マサムネ殿以外は心配いらないだろうが」

オバマまではドラゴンで二時間つてところらしい。一般人にはあり得ないが、エンジェルティアの王族だけはドラゴンを乗用できる。今回は行き帰りの安全面と時間短縮を考えて、ドラゴンで移動するようになったのだ。

俺はシヨコラといっしょにベクレルに跨る。レオナはいかにも慣れた風で、プルトニウムに乗って手綱を掻い繰る。

「マサムネさん、しっかりと掴まっていますう」

「お、おう」

馬さえ乗ったことのない俺にとっては、いかに巨大なドラゴンでもかなりビビる。それでもシヨコラの小さな腰に腕を回すと、少し

は安定できた気がした。

「じゃ、しゅっぱあ〜っ！」

レオナが楽しそうに叫ぶと、プルトニウムは陽光きらめく青空へと勢いよく羽ばたいていく。その様子を、目を細めて眺めていると体が一瞬沈む。次の瞬間内臓が全部下方へ引っ張られ、俺の耳にはごうごうとした風の音しか聞こえなくなる。

「うわあああっ！」

俺とシヨコラを乗せたベクレルは、大空の真っ只中へぐんぐんと上昇していった。

第11話 グリフォンと共に

鳥が空を飛ぶ原理は授業で習った気がするが、飛行機とは異なるものだったのはよくわかる。俺が今まさに、体験しているからだ。

「ぐあつ、へあつ！」

「マサムネさん、うるさいですう。少しは景色を楽しんでさう」

「そ、そうは言っても…… あげっ！」

“羽ばたく”というのはある意味、空気の塊を羽で掴むのに似ている。ベクレルが羽ばたくたび、胴体が大きくホップするのだ。翼を持ち上げればフリーフォールのように落下する。羽ばたけばロケットのように急上昇する。

俺はさほど時間を掛けずに、乗り物酔いになると思った。いや、この場合“ドラゴン酔い”か？

「マサムネさん、ベクレルの動きに体を合わせるですう。慣れれば気にならないですよ」

「慣れればって、そ、その前に死ぬ」

遠くにきらきらとした海が見える。とてもじゃないが、下を見る余裕はない。俺は高所恐怖症ではないし乗り物酔いをしやすいわけでもないが、椅子もなく動物に両足で跨っただけの状態で景色なんか楽しめるわけがない。

「おわっ！」

そんなことを言ってる間に、俺の体がズレる。硬いウロコで擦れた内ももが痺れて、力が入らなくなってきたためだ。

むにゅ。

ん？

「きゃん！」

俺の右手が、信じられないくらい柔らかい塊を鷲掴みしている。振り落とされないように必死な俺には、状況を確認する余裕なんてない。そう言ってる間に体がぐんと上昇する。

「あわっ！」

むにゅむにゅ。あ、なんか気持ちいいかも。

俺は右の手のひらに握った物体を、指で揉んでみる。
むにゅにゅ。

「や、やああ……うち、胸は弱いんですう……」

「へ？」

シヨコラの背中から伝わってきた言葉に、俺ははっとする。ま、まさか……

「マサムネさんって、意外とダイタンですう……」

俺の右手は、シヨコラの豊満な胸を鷲掴みしていた。シヨコラは手綱を握った両手を桃色に染まった頬に当て、いやいやをしている。硬直した俺は、次の瞬間両手をシヨコラから勢いよく放す。

「わ、わりい！ わ、わざとじゃねえ！ こ、これは事故……」

ちよつと待て。何でベクレルの“腹”が見える？ しかも何でだんだんと小さくなっている？

「どわわわあ〜！」

体全体を包み込む浮遊感。いや、違う。

「お、落ちてんじゃねえかあああああああああ！」

俺は陽光きらめく虚空に、体一つで投げ出されていた。

「マサムネさ〜ん！」

シヨコラが慌てて手綱を引き、ベクレルを旋回させている。しかしその姿もあつという間に小さくなっていく。耳をつんざくような風の音しか聞こえなくなり、体中の血が頭に上ってくる。俺は逆さまになって、地上へぐんぐんと近づいていた。

ああ…… この世界に来て、俺の人生はろくなことなかったな……俺はこのまま地面に叩きつけられて、潰れたトマトみてえにぐちゃぐちゃになって死んじゃまうんだろな。

結局俺は、そういう運命かよ。ハゲジイにチャンスもらったはずなのによお。せめて生まれ変わったら、ミミズとかオケラじゃねえことを祈るか……

いわゆる自由落下をしていると、景色は止まって見える。本当はものすげえスピードで墜落してんのに。頭の上には天井のように、雄大な自然と道らしいくねった白い線が見える。思ったより高いとこ飛んでたんだな。このまま空とか飛べたら楽しいのによお。

そんなことを考えていたら、急に日が翳る。途端にがくと落下が止まり。上下が元の状態に戻る。見る間の上着が持ち上がったいき、へそが丸出しになる。って、これは……

「ほほほ！ セクハラなどをしてるから、バチが当たったのよ！
いつそそのまま潰れて死ねばよかったのに」

「て、てめ！ ……いや、レオナ様」

俺の横には青いドラゴンに跨ったレオナが、豪奢な金髪を後ろへ吹き流しのように靡かせながら飛んでいる。

「でもあなたが死んだら、わたくしがマーケットに行けなくなってしまうわ。だから“しょうがなく”助けてあげるわ」

「助けてって……」

力強い羽音がして、俺はおそろおそろ見上げる。

「くえええっ！」

「ぎええええっ！」

そこには嘴の先でリュックを啜えたモンスターが、ぎろりと俺を睨んでいた。

「おゝほっほっほ！ グリフォン、そいつがわたくしに生意気なことを言ったらそのまま落としておしまいなさい！」

「や、やめる！ じゃなくて、おやめくださいレオナ様！」

「おゝほっほっほ！」

「くええええっ！」

前半分が驚、後ろ半分がライオンという異形のモンスターは、レオナお得意の召喚獣だろう。ドラゴンよりは一回り小さいが、その分小回りは利きそうだ。

「マサムネさま、無事でよかったですう」

「シヨコラ、セクハラは大丈夫でしたか？」

「はい、ですう。マサムネさんは意外と大胆ですう」

シヨコラは恥ずかしそうに、赤らんだ頬を両手で覆う。

「わああ、違う違う！ あ、あれは事故で」

「ふう〜ん…… お前は事故を装って女の子の胸を揉みしだくような、ド変態セクハラ野獣だったのね。知ってたけど」

「違う違うう〜！」

しかし実際シヨコラの胸を触ってしまった手前、強くは反発できない。しかも宙づり状態だし。

「罰として、オバマまでその状態で逝きなさい」

「い、今違う意味で言った！ “逝きなさい” だった！」

「お〜ほっほっほ〜！」

眼下はすでに、真っ青な海ばかりが広がっている。遠くに灰色の山嶺が見えてきて、俺は腹丸出しのテルテルボウズ状態でそこへ向かって輸送されていった。

第12話 要塞都市の公爵令嬢

傭兵国家の異名を持つオバマ王国は、いわゆる「半島国家」というヤツだ。三方を海に囲まれ、唯一東だけが大陸とつながっている。そのため外敵に対しては守りやすいという。

資源的なものは皆無だが海運業や漁業が盛んで、魚介類の美味さは天下一品らしい。久しぶりに刺身とか食べそうだ。

そして何より傭兵ギルドが発達した国だ。「ギルド」というのはいわゆる“同業者組合”ってヤツだ。国内外を問わず様々な依頼を受けて、それ相応の技量を持つ傭兵を派遣する。通常傭兵などのように血生臭いギルドは、民間かマフィアが取り仕切っているらしい。実際エンジニアティアにも傭兵ギルドはあって、二つの民間企業が経営している。まあ平和なエンジニアティアでは警備や危険な場所の荷物輸送などの仕事しかないようだが。

ところがこのオバマはなんと、国が傭兵ギルドを運営しているのだ。つまり国営の傭兵ギルドってわけだ。資源の少ないオバマは、日本と同じく人材が資源となる。詳しいところまでは俺もまだ勉強してはいないが、オバマって国自体が元々が軍事国家だったことが関係しているらしい。とにかく柄の悪い危険な国ってイメージだ。

そんなところに、一国の王女がたったこんだけの護衛で出かけたりにしていいのかなって気はする。王様が反対してたのも、当然だな。「レオナ様、見えてきましたあ！」

ベクレルがひと鳴きして下降し始める。

海岸からはずっと森が続いていたが、海が見えないくらい内陸に入ると岩肌の露出した峻険な山ばかりになった。もし徒歩で移動していたら山を越えるまでは二、三日はかかっただろう。

山を越えたところは盆地になっており森や川、湖が点在する風光明媚な場所に出た。そのほぼ中央に、円形の茶色い市壁に囲まれた都市があった。そこがオバマの首都、要塞都市ダーノンだった。

ダーノンは直径五キロほどの楕円形をしていて、周りを高い石の壁に囲まれている。何かで見た古代中国の都市のようだ。お約束通り東西南北にはアーチ状の通用門があり、出入りには検問がある。空からは豆粒みたいな人間や馬車が、列を作って入場を待っているのが見えた。

「レオナ様あ、俺ら撃ち落とされたりしないんですかあ？」

「大丈夫よ。ベクレルとプルトニウムはエンジェルティアの象徴。

畏敬の念は抱かれても、不審がられることはないわ」

「そっか、よかった…… って、俺は？」

俺はグリフォンに吊されている。グリフォンはいわゆるモンスターだ。ってことは、思いつきり不法侵入者って思われんじや……

「だからこうして、挟んで飛んでやってんじやない。感謝しなさい」

「あ、そうすか。じゃなくてお氣遣い痛み入ります、レオナ様」

俺は吊されたままお腹に手を当てて深くお辞儀をする。執事の礼法だ。作法の一つとして、メイド長のアンネラに最初に習った。

「ふん」

レオナを乗せたプルトニウムは、ベクレルの後を追うように下降していく。一瞬遅れて、グリフォンもついていく。本当にレオナには懐いているようだ。

ダーノンの中心部には、オバマ大統領…… じゃなくて王様のいるお城がある。王様ってこういうところにいるもんだ。鳶の絡まるお屋敷なんて、王様って感じじゃねえもんなあ。

俺は徐々に近づいてくるお城を、わくわくしながら眺めた。

テレビで観たどっかの国の王宮みてえに、お城は細く尖った塔が何本も林立している。二頭のドラゴンと一頭のグリフォンは、その間を縫うように飛んでいく。そして下に目にも鮮やかな若草色の芝生が見え、俺たちはそこに着地した。

「ぐえっ！」

着地寸前に嘴から放り捨てられ、俺は柔らかい芝生に墜落した。

くっそ、この化け物め！ もうちょっと大人しく下ろせよ！

「ん？ 見慣れないヤツがいるな？ キミは誰だ？」

角張ったしゃべり方をするボーイソプラノが聞こえた。俺の前には磨き抜かれた黒光りする革靴があった。視線を上げていくと、真っ白なハイソックスを履いた細い足が見えた。その上にはゆったりとしたスカートのような黒いズボン、キュロットスカートというものか？ を履いた細い腰があり、その上には金ボタンの並ぶ紺のブレザーにひらひらの襟のついた白いブラウスが見えてくる。

「ニツカ様、マサムネさんはレオナ様の執事さんですう」
「執事？」

ひらひらブラウスの上に、赤い楕円形の眼鏡を掛けた丸い小顔が載っていた。髪は鮮やかなライムグリーンのショートカット。同色の瞳がレンズの奥から興味深げにこつちを覗き込んでいる。

「そうか、レオナが言っていた変態野獣とはキミのことか？」

「なっ！ あ、あのアマ……ん、こほん。あなたがレンドルフ公爵様の娘さんですか？」

「ああ、ボクはニツカレンドルフ。レオナとは幼い頃から仲良くさせてもらっているよ」

ニツカはニヒルな微笑みを浮かべて、右手を差し出す。俺は小さなその手を握って立ち上がる。

「俺は、じゃなくて私はレオナ様の執事をしております、マサムネレリユウドウと申します。マサムネと呼んでください」

「なんだ、名前があったのか。レオナからの手紙では、野獣か変態のどちらかで呼ばばいいと書いてあったのだが」

「ぐ……」

返す返すもあのクソアマはムカつく。しかしニツカ嬢は見た目もしゃべり方も少年みたいだが、なかなか頭は良さそうだ。常識もありそうだし、少し安心した。

「あの、エルザはどこにいますか？ 先にこちらへ来ていたと思うのですが」

「ああ、彼女なら」

「レオナ様！」

ニツカがそう言いかけた時、城の出入り口から褐色の大女が走って来た。金のプレートメイルに強化合皮の腰当てを装備している。もちろん左の腰には長剣を提げている。他国の王城で武器を携行できるのは、レオナの護衛という立場だからだろう。

「エルザ、お役目ご苦労様。すまなかつたわね、こんな遠くまで来てもらって」

レオナが俺に向けるのとはまったく違う、思いやりに溢れた笑顔で迎える。その百分の一でも俺に振り分けてほしいもんだ。

「いえ、臣下として当然の仕事ですから。ニツカ様もわざわざレオナ様のお出迎え、痛み入ります」

「ああ、構わないよ。レオナが来るのは久しぶりだからね。ボクも待ちきれなかつたのさ」

ニツカは淡々とした様子でエルザと握手し、俺をちらと見る。

「それにしても例の執事とやらにはびっくりしたよ。あんな金髪で髪をぴんぴんに立てて、耳にピアスマまでしてるなんて。どこのチンピラかと思つたよ」

「はは、その辺のところは後ほどゆっくりレオナ様にお聞きください。でもなかなかいい男でしょう？」

エルザは俺の肩をがっしりと引き寄せ、ばんばんと叩く。

「いてっ！ エ、エルザ、痛えって！」

「それに、なかなかいいもん持つてんすよ」

そついうとエルザはまた俺の股間を鷲掴みする。

「ぐああっ、や、やめろって！」

馬鹿力で肩をがっしりとホールドされているため逃げようがない。エルザの大きな手のひらが、俺の股間をわしゃわしゃと揉みしだく。

「あ、あふっつう……」

「エルザ、遊んでないで公爵様のところへ挨拶に行くわよ。ニツカ、案内して」

「はい！」

エルザは背筋をぴんと伸ばして敬礼する。レオナを先導して歩いていくエルザの後ろで、ニツカが俺を見つめていた。くっそ、握り潰されちまうかと思った。おーいて。

「なあ」

「へ？」

ニツカは細い人差し指を柔らかそうな唇に当て、ライムグリーンの瞳で俺をじっと見つめている。若干、頬が桃色に染まっているのはなんでだ？

「ボクにも後で、握らせてもらっていいかな？」

「だあ〜！ な、何言ってるんすか！」

ニツカはやっぱり、なるべくしてなったレオナの腐女子仲間だった。

第13話 ニツカとマサムネ

現代日本に育った俺としては、爵位とか貴族とかよくわからん。しかし偉い人だというのはわかる。エルザやシヨコラにいる聞いたが、簡単に言えば公爵とは限りなく王族に近い他人なんだそう

だ。
元軍事国家のオバマは、クーデターやテロリズムの脅威に常に晒されていた。そのため強力な軍事力を常に維持しておかなければならない。公爵位とは、国を維持するための軍事力を与えられた者だけの爵位らしい。つまり王族とは強固な信頼関係がなければならぬ。いつ裏切るかわかんねえやつに軍隊なんか任せておけねえからな。

今オバマ王国にいる公爵はレンドルフ公爵ただ一人。つまりこの国では実質的に一番「強い」やつということだ。

ただそれだけの武力を持っているがために、自分の領地は与えられない。自分の領地を持てるのは侯爵と伯爵だけだ。

日本でいう「府」や「県」に当たる領地を治めているのが「侯爵」。「市」や「町」「村」を治めているのが「伯爵」。「子爵」や「男爵」は自分の領地は持っていない。一番低い「男爵」のさらに身分の低いやつになると、ほとんど一般市民と変わらないらしい。

まあ細かいことは置いといて、とにかくニツカの父親ってのはかなり偉い。偉いけれども自分の領地は持ってないってとこだけはわかった。

「遠路はるばるよくお出でくださいました、レオナ王女様」

映画でしか見たことのないような横長のテーブルから、ひげ面のゴツイオヤジが立ち上がる。どうやらこいつがレンドルフ公爵らしい。

顔の下半分を覆い尽くす密林のような黒い剛毛は、どうやらヒゲらしい。頬に走る稲妻型の傷は明らかに刀傷で、強引に溶接したよ

うに白く盛り上がっている。太い眉にひと睨みで猛獣だって殺せそうな眼光だが、レオナに向ける視線は慈愛に満ちている。ウェーブがかかった硬質な頭髮は、高貴な身分を表すかのように油脂でテカっている。

「レンドルフのおジサマ、お久しぶりでございます。去年のニツカのお誕生会以来ですから、約一年ぶりですわね」

「いや、ご無沙汰してしまって申し訳ない！ いろいろ国内が立て込んでおりましてな！ それにしても、レオナ王女様は会うたびに美しくなられますなあ！」

レンドルフ公はキャッチャーミットのような手でレオナと握手し、目尻をふにゃあと下げる。一見すると海賊みたいな顔が、こうなると台無しだ。

「それでこちらが例の」

レンドルフ公のぎょろりとした目が俺に向けられる。別に何も悪いことはしていないが、何となくビビってしまう。

「はい、エンジェルティアの汚物ですわ」

「『ですわ』って！」

「はっはっはっ！」

レンドルフ公は豪快に笑って俺の背中をバンバン叩く。

「げふっ！」

「レオナ王女様がここまで毒舌されるとは、そなたはかなり気に入られておるな！ なかなかいい男だし、ニツカのことでもよろしく頼みますぞ！」

「パパ、ボクこの執事欲しい」

「なぬ？」

レンドルフ公は驚いてニツカを見る。あまり表情豊かでないニツカは、まじめなのか冗談なのかわからない。しかレンドルフ公の反応を見る限り、冗談ではなさそうだ。

「し、しかしマサムネなのはレオナ王女様の執事で」

「あらあ、いいわよ！ 煮るなり焼くなり八つ裂きにするなり好き

にして！」

「レオナ様！」

俺はたまらずレオナに詰め寄る。

「うん、好きにさせてもらうよ」

ニツカは至極真剣に頷く。ちよっと待て。

「食事が終わったらボクの部屋に来て」

呆然とする俺を置いて、ニツカとレオナは談笑しながら席に着く。気づくとレンドルフ公が俺の脇に近づいていた。

「マサムネどの。わかつてはおろうが娘に手を出したら、国際問題ですからな」

「んが！ お、俺は手え出したりしませんって！」

「はあくはっはっはっ！」

レンドルフ公はまたバンバンと背中を叩く。ほんとこのオッサンわかってんのかな。

とりあえず俺は憂鬱な気持ちになりながら席に着いた。

残念ながら刺身は出なかったが、魚を中心とした豪華な食事に満足した後、俺は仕方なくニツカの部屋へ赴いた。少し気になることがあったからだ。決して邪な気持ちからではない。

くれぐれも手を出さないようにエルザに注意、いや脅迫されて俺はニツカの部屋のドアをノックした。中から応答があってドアを開ける。中は思ったよりこざっぱりした広い部屋だった。

「よく来てくれたね」

「ああ、俺はレオナの執事だからな。イケ好かねえワガママ暴言娘だが、だからって誘拐されてもいいってわけじゃねえ」

「ふむ、よく気づいたね。パパが緊急警備態勢を敷いていることにそう。一見レオナにはわからないようにしているが、この城には異様なほどの緊張感が充満している。そこから中から剣呑な視線を感じるし、エルザもどこか落ち着きなかった。」

「何かお前は情報仕入れたのか？」

俺は二ツカに促されてソファに腰掛ける。このボーイツシユなお嬢様はかなり“キレる”。おそらく父親以上に事態の本質を見抜いているのだらう。だからこそ俺はここに来た。エルザでさえ掴めなかつた情報を得るために。

「“赤い月”が動いている」

「何だそりゃ？」

俺は手を後ろで組んで、薄く微笑みながら姿勢良く立っている二ツカを見る。このお嬢様はただの腐女子じゃねえ。俺は得体の知れない悪寒で、背筋が寒くなった気がした。

第14話 テボラの陰謀

「“赤い月”は東にある草原国家『テボラ』とつながりのある傭兵集団だ。暗殺や要人誘拐、テロなど金次第で何でも請け負う」

「そいつらがレオナを狙ってるってことなのか？」

ニツカはこくりと頷く。

「でもなんでだ？ やっぱあれか、狙いは金か？」

「ふ〜む……」

ニツカは白く細い指を顎に当てて、思案げに俺の向かい側に座る。身長百五十センチにも満たないほどの小さな体が、ぽさつと音を立ててソファに沈む。

「そこまではわからないが、ボクはもつと根が深いと読んでいる」

「どういうことだよ。俺こっちの世界に来てまだ間もねえから、世界情勢とか政治とかよくわかんねえんだよな。元々興味ねえし」

ニツカは今思い出したかのように手をぼんと叩く。

「そうか、キミは異世界人だったな。ではこの国を取り巻く国際情勢から話してやった方がよさそうだな」

「ああ〜ダメダメ！ そういうの聞くと眠くなっちゃう。掻い摘んで簡単に説明してくれ！」

「く〜く〜…… やはりレオナの言った通り、野獣鬼畜野郎らしいな」「ふん、面倒くせえ込み入った話が苦手なだけだ」

俺は基本、拳で語ってきた。繁華街の路地裏で体育館の裏庭で夕方の方の河川敷で。だから細かい頭脳戦とかは苦手だ。もちろん謀略や計略などに嵌められたくはないから、情報だけはしっかりと手に入る。現代の不良は、腕っ節だけじゃあ務まらないのは常識だな。

ニツカには俺と正反対の「悪」の臭いを感じた。俺が突撃隊長なら、ニツカは作戦参謀ってとこだな。だからレオナに危機が迫ってるっていうなら、ニツカにはぜひとも協力してもらわなきゃなんねえ。

「ふふ、まあいい」

ニツカは右手の中指で眼鏡をクイツと持ち上げる。

「この国が半島国家なのは知ってるよね」

「ああ、一応その辺は勉強してきた」

「遙か東で大陸とつながっている」

「ああ」

「赤い月は半島の付け根部分、つまりデボラと国境を接する『ニール県』が本拠地だ」

「それがレオナと何か関係あんのかよ」

ニツカの眼鏡の奥の目がきらりと光る。

「国境を封鎖されれば我が国に逃げ場は無くなる」

「海に逃げればいいだろ？ この国には港だつて軍艦だつていっぱいあんだろが」

『背水の陣』つて言葉は知ってるが、それは重い甲冑を着こんだ兵士が河を背にした場合だ。軍事的大国であるオバマが、陸路を封鎖されたからつて別に恐れることはねえだろう。

「そう。国境を封鎖されても、我が国にはまだ海軍がある。しかしデボラには海軍はない。騎馬民族による草原国家だからな」

「ああ、もう！」

俺はわけがわからなくなつてイライラする。こういう禅問答みたいな遠回しな知的ゲームは嫌いなんだ！

「だからそれがどうレオナに」

「エンジェルティアは狭い海を隔てた隣国だ」

俺はそこでようやく気がついた。エンジェルティアは平和な国だ。軍隊らしい軍隊はない。有事の際には、強力な同盟国であるオバマが後盾になつてくれるからだ。

「それにエンジェルティアにはレアメタル鉱山がある」

「ミスリル銀か？」

これも最近勉強させられたことだが、エンジェルティア南部にはミスリル銀と呼ばれる非常に稀少で貴重な鉱脈があるらしい。貿易

国家でもあるエンジェルティアがこれだけ平和で、しかも裕福なのはそのお陰だ。

「ボクもちよつと考えが飛躍し過ぎなのかも知れないが、デボラはレオナを人質に取ってミスリル銀の独占と海への出口を欲しがっているのではないかと思っている」

「ちよ、ちよつと待てよ！ それって戦争になっちまうじゃねえか！」

さすがの俺もかなりビビった。そんなスケールのでけえ国家的陰謀に巻き込まれるなんて、聞いてねえし！

「エンジェルティアはオバマの喉元に突きつけられたナイフだ。そしてデボラにとっても、我が国を攻めるための重要な橋頭堡となる」
「まじかよ……」

これはまだニツカの予想に過ぎない。現実はただの金に目が眩んだ強盗団が、レオナを誘拐しようとしているだけかもしれない。さらに、それすらもはつきりしていないってわけだ。

「あのよ……」

「ん？」

ニツカが真剣な目で俺を見る。

「もし万が一お前の考えが当たってたとして、俺らはどうすればいいんだ？」

「そうだな。まずはレオナから絶対に離れないということだな。赤い月は腕利きの傭兵集団だ。ほんの一瞬目を離しただけでも命取りになる。例え衆人環視の中だとしてもだ」

つまり俺やエルザ、頼りになるかどうかかわらんがシヨコラの三人でレオナにぴったりくっついてればいいわけか。

「心配しなくていい。ボクもレオナから離れないさ」

「そりゃ頼りになるな」

とりあえず言うておく。この眼鏡ボクっ娘の頭がいいのは十分わかったが、荒事には向いてねえだろう。その赤い月とかって組織の傭兵が本気で襲ってきたら、シヨコラやニツカではどうしようもね

え。いや、まともにやり合えるのはエルザくらいだ。俺のケンカ殺法が、プロの傭兵に通用するとは思えねえし。

「こりゃ明日は、長い一日になりそうだな」

「フフ、終わってみれば杞憂に過ぎなかったってことになるかもしれないしね」

「ああ、それが一番だな」

俺がソファから立ち上がろうとすると、ドアが勢いよく開く。

「ちょっとクソムシ！　いつまでニツカの部屋にいるつもりよ！　わたくしのかわいい親友が妊娠しちゃうから、とっとと出て行きなさいよ！」

「だああつ、クソムシってなんだよ！　それになにか？　俺は歩く生殖器か？」

「おゝほっほっほ、墓穴を掘ったわね！　あなたは今から移動式子種製造機よ！」

レオナは湯上がりなのか、自慢の金髪が濡れて艶めている。豊かな胸を反らせて、手の甲を口に当てて大笑している。くっそ、ムカつく！　まじで誘拐されちまえ！

「ふふっ！　レオナはお風呂から上がったてもキミが戻って来ないから、相当焦ったみたいだね」

いつの間にか俺の後ろに立っていたニツカが、耳元でぼそりと咳く。

「はあ？」

「こらっ、いい加減自分の部屋にお戻りなさい！　これからわたしたちは、明日の作戦会議があるんですよ！」

「へいへい」

俺はレオナが指さす通りに、素直に部屋を出る。さっきのニツカの言葉はどういう意味だ？

俺はドアを閉める時の、ニツカのいたずらっぽい微笑みが気になつて仕方がなかった。

第15話 マサムネのミス

人が集まると確実に気温は二、三度上昇する。ホコテンとかそうだが、俺は基本的に人いきれが嫌いだ。一時期日本で新型インフルが流行ったが、あれだって流行の原因は人いきれによる飛沫感染だ。狭い範囲に人がたくさん集まれば、否が応でもウイルスなどに感染しやすくなる。

それにこの世界は見た目通り西洋風の文化が主流のようで、一般人は毎日風呂に入るっていう習慣はないらしい。汗や体臭が膾炙返るホールは、呼吸さえままらない。

「レオナ様、仮にも一国の王女様がこんなところに来ていいのですか？ どう考えても貴族のパーティには思えませんか？」

「きゃああつニツカ、見て見て！ アランドール様の新刊が出てるわよ！」

「聞いてねえし」

俺たちはマーケットに来ていた。通常は食べ物や服などを売っている全天候型の広い市場には、見渡す限りの本と人で溢れかえっていた。

今回コミケ…… いやマーケットが開催される『ダーノン中央市場』は、オバマ王城から歩いて三十分ほどのところにあった。会場周辺は混雑が予想されたため、王城からはカモフラージュも兼ねて歩いて来た。高級な馬車とかで乗り付けたら、いかにもVIPですよって教えているようなもんだからな。目立つ行為は極力控えたい。要塞都市らしく石畳で舗装された街路は歩きやすく、街並みも質実剛健。チャラチャラした店はほとんどない。靴屋の隣に靴の修繕屋があり、洋裁店の隣に服飾ディーラーの事務所がある。そんな風に、実用性を重視した合理的な街並みといった印象だ。

だからこそだ。だからこそ俺は納得がいかなかった。

「きゃああつニツカ！ あれ、『憂鬱なダンディ』に出てくるヨー

デヘル伯爵のコスプレではない？」

「どれ？ ほう、なかなか似ているな。体型もそっくりだ」

「サインをいただいで来ましょう！」

おいおい…… ヨーデルだかヨーグルトだか知らないが、コスプレってことはただのファンだろ？ 一般ピープルだろ？ サインもらってどうすんだよ。

しかも何だそのタイトル。「憂鬱なダンディ」って。BLってえのは、まじで理解に苦しむ。俺には到底理解できない世界だな。

これだけ機能的で質実剛健な硬派な都市で、なんで腐女子の祭典が開かれるんだ？ 解せぬ。本気で納得がいかねえ。

俺はテンションアゲアゲではしゃぎまくるレオナの後を、ため息とお友達以上恋人未満になりながらついて行った。

「はい、次はあつちの同人誌ブースに行きましょう」

「お、おい！ まだ買うのかよ、じゃねえ買うんですかレオナ様！ おわっ！」

次々と高さや重量を増していく本の山に、俺はまともに歩けなくなりつつある。まだ昼前だったのに、すでにレオナとニツカが買った本は五十冊を超えている。これすでに大人買いの次元を超えてるつつーの！

「うちはもうだめですっ」

パンパンに膨れあがった紙袋を両手に持たされたシヨコラが、壁際に座り込む。

「俺もダメだ、休憩！」

シヨコラの脇に本の山を投げ出し、俺もへたり込む。いくら数年に一度の特別なマーケットだからって、あいつらはっちゃんけ過ぎだつてえの！

「おい、レオナ様たちが行ってしまわれたぞ！」

エルザは万が一に備えて荷物は持っていない。正確に言えば、レオナからエルザに渡された荷物が自動的に俺に来てるわけなんだが。

「ああ、悪いけど先に行つてくれ。俺らちょっとここで休んでいくわ」

「つたく、早く来いよ！」

エルザは舌打ちをして人混みに紛れていく。長身金髪美形のエルザは、人混みの中でも一際目立つ。レオナたちが向かった同人誌ブースとやらはすぐそこみたいだし、少し休んでから行けばいいだろう。何よりこれだけ腕が痺れちまったら、何かあっても役に立たねえし。

「なあシヨコラ、この世界には宅急便とかがつてねえよな？」

「たつきゆうびんつてなんですかあ？」

気怠そうにシヨコラが半目を開く。疲れて眠そうだ。

「ああ……聞いた俺がバカだった」

これだけの荷物を持って城まで戻ることを考えたら、かなり憂鬱な気分になる。こりゃ、まじで馬車で来りゃよかつたな。

そろそろ行こうかと立ち上がって腰を伸ばしていると、焦った顔でエルザが戻つて来た。

「おい！ レオナ様を見なかったか？」

「あ？ お前がついてつたんだろ？ ここには戻つて来てねえぜ？」

「くそ、見失つた！」

エルザは歯がみして周囲を見回している。どこもかしこも人だらけで、ちょっと見ただけではレオナたちがどこに居るかなんてわかりはしない。目立たないように一般庶民の服装をしてきたことも、この場合は裏目に出ている。

「どうせそこらでエロ本でも物色してんだろ？ こんだけ人がいりゃあ、悪人だつて悪さなんてできねえよ」

「ならいいが…… 仕方ない、もう一度会場を一回りして来る。お前たちはここで待っていてくれ」

「あいよ」

俺にはその時確かに油断があつた。万が一誘拐されそうになつたとしても、レオナには召喚魔法がある。マンティコアだのグリフォ

んだののモンスターを出せば、その辺の強盗や傭兵なんかにみすみ連れ去られるわけではないと。

しかしそれは、俺の大きな間違いだった。

第16話 王女誘拐

「おっせえなあ」

エルザが慌てて走り去つてからすでに三十分以上が過ぎていた。ここは確かに広い市場だが、いくら何でも目のいいエルザがこれだけ探し回つても見つけれないつてのはおかしい。俺はだんだんと胸に不安がのしかかってくるのを感じていた。

もしかして…… やっちまったか？

「マサムネ！」

すると目の前のオタクっぽいグループを押しつけながら、エルザが慌てた様子で現れた。普段は完璧に整えている金髪が乱れている。相当人混みの中を掻き分けて探しまくつたんだろつな。

「トイレや裏の方まで探してみたが、二人ともどこにもいらつしやらない。悪いがお前も手伝つてくれ。悪い予感がする」

「くっそ！ ショコラ、お前ここで荷物見張つてろ！」

「わ、わかりましたですう」

ショコラは泣きそうな顔でB本やショタ本の山に抱きつく。巨大な胸が、唇を近づけているイケメン同士の表紙で潰れている。それはそれで滅多に見られないシニールな光景だけに、ちよつと嬉しくなつた。

「俺は外回りを見てくる。お前はもう一回中を見て回れ！」

「ああ、わかつた」

エルザはそういうと、舌打ちをして荒々しく歩き去る。不運にもエルザの進行方向にいた長髪のキモヲタ野郎が、吹っ飛ばされて横の本の山に頭から突っ込んだ。

「荒れてるな…… こりゃ早いとこ見つけねえと」

俺は最悪の事態を想定して身震いした。まじでレオナが誘拐されたなんてことになったら、エルザはきつと大暴れするだろう。そうになったら、この会場にいる人たちを避難させねえと。

俺は何気なく非常口の場所を確認しながら外へ出た。

ダーノン中央市場は商取引の盛んな一帯のど真ん中にある。周囲には大手商会の卸売り市場や倉庫などが建ち並び、華やかというより重々しくて近寄りがたい雰囲気だ。東京で言うところの国際展示場周辺みたいな感じか。あそこもよくコミケとかやってるみてえだしな。行ったことねえけど。

とにかくそんなわけで、周囲はでかい建物が多い。さすがに五階建てがせいぜいで、東京みてえな高層ビルはない。それでも周囲の圧迫感は生半可ではなく、人気の少ない薄暗い路地も多い。

俺は会場から出ると、人の流れから離れて倉庫が建ち並ぶ方へと歩いて行った。会場の角を曲がって路地に入りかけた時、会場の反対側の方で大きな爆発音がした。

「きゃあああっ！」

紙袋を持った腐女子らしき二人組が転倒する。その向こうでは、バラバラと重い石が落下する音が続く。俺は急いで会場の角を回り込み、音のした方へ走る。すると目の前の建物の屋根が破壊され、大穴が開いていた。周囲にはうっすらと白煙が立ち込め、人間の頭より大きな石のブロックが通りいっばいに散乱している。

「な、なんだ？ 何が起こったんだ？」

狼狽えて辺りを見回していると、空から奇怪な鳴き声が降ってきた。それはまるで怪獣のようで、カラスの鳴き声を百倍くらい邪悪にしたような不快感があった。

見上げるとドラゴンのような動物が、血管が透けて見えるような薄い翼を広げて空に上昇して行くところだった。どうやらあいつが建物から飛び出して、この状況になったらしい。そのドラゴンのような生き物の向こうの空には、さらにもう一体同じようなのがどんどん小さくなっていく。

俺はその生き物の背中では、何かがきらりと光を反射するのを見た。あれはヘルメットだ。いや、兜って言えばいいのか？ つまりあのドラゴンモドキには、人間が乗ってるってことだ。目の前のドラゴ

ンが、空中でくると向きを変える。やはり背中には、緑色のウロコがびっしりとついた甲冑を着込んだ人間が跨っていた。そしてなぜか、その人間のケツの後ろには大きめの麻袋が縛り付けてあった。大きき的にはちょうど人間一人分くらいだ。

通りは瓦礫とけが人で溢れかえっている。石が頭に直撃した人もいるらしく、ところどころで呻き声や悲鳴が聞こえる。

ドラゴンモドキは一声上げると、ものすごい速度で空へ上っている。その風で吹き散らされた白煙が、屋根の向こうへと流されている。

「マサムネ！」

呆然とその様子を見てみると、前方から血相を変えたエルザが走ってきた。エルザは血走った目で俺の両肩をがしつと掴む。

「見たか？ 今のはワイバーンだ！ まさかドラゴンライダーまで出てくるとは！」

「ま、ままま待て待て！ 何がいったいどうなってるんだ？」

「バカ、レオナ様だよ！ 今のやつらに誘拐されたんだ！」

「くそっ、そうか！」

ウロコ甲冑を着込んだヤツの後ろに縛り付けられてた大きめの麻袋。あれにレオナが入れられてたんだとしたら、先に行ったヤツにはニツカか！

「ど、どうすんだよ！ 空飛んで逃げられちゃったら、どうしようもねえだろ？」

「オレは今すぐ城に戻ってプルトニウムで追う。マサムネはシヨコラを呼んで来てくれ！ ベクレルを操れるのは後はシヨコラだけだ」
「わ、わかった！」

俺は王城の方へ猛然と走り去るエルザに背を向け、騒然とする通りを横切る。どんどん人が飛び出してくるマーケット会場に入ると中も大騒ぎになっていたが、けが人などはいなさそうだ。さっきと同じ壁際では、シヨコラが不安そうな顔でうろろ歩き回っていた。
「シヨコラ！」

「マサムネさん！ いったい何があったのですかあ？」

シヨコラは今にも泣き出しそうだ。俺は掻い摘んで事情を説明し、シヨコラにはすぐにベクレルでヤツらの後を追うよう話した。

「わ、わかりましたあ！ 捕まえてベクレルの放射能火炎で丸焼きにしてやるですう」

「いや、放射能は止める！ レオナが死んじゃうから！」

シヨコラは眉毛をVの字にして、ててと走って行った。

「さて、と……」

俺はこういつ時まったく無力だ。せいぜいこの大量の荷物を、王城へ運ぶことぐらいしかできねえ。かといって、これは一人で運べる量じゃねえ。会場も外も騒然としてるから、のんびり馬車とかを雇うこともできそうにもねえ。

レオナは心配だが、俺には俺にできることを…… って、え？

俺は一瞬自分の目を疑った。

騒然とした会場では、人々はみな通りの方を不安げに眺めている。しかし人目を憚るように会場の奥、裏口につながる通路に見慣れた金髪とライムグリーンの髪が消えるのが見えた。

それはそれぞれ、屈強な男たちの肩に担がれていた。

「おい！」

俺は近くにいたナントカ伯爵のコスプレ男を捕まえる。

「な、なな、何ですか？」

「金やるから、この荷物ここで見張ってる！」

俺は金を数枚そいつに握らせ、男たちの消えた通路へと走り出した。

第17話 追跡

裏口を出ると、目の前には隣の倉庫の壁があった。一人分ほどの狭い路地が左右へ伸び、左へ行くと騒ぎがあつた広場に出て右は俺がさつき行きかけた倉庫がある。

レオナとニツカを担いで行つたのなら人目を避けるはず。俺はそう睨んで右へと向かつた。

大きめの路地へ出ると今度は左へ曲がり、暗い倉庫の中へ入る。そこは何もないがらんだつた。どうでもいいけど「がらんだ」と「ギヤランドウ」って似てるよな。

「む？」

静かな倉庫の奥の方で、砂を踏みしめる足音がした。ここで働いてるオツサン（推定五十三歳既婚、娘二人。日頃加齢臭のことをバカにされ、小さい頃はかわいかつたのにと嘆いている。酒と演歌が大好きで、通販で買ったマイク型カラオケをお風呂に持ち込んでサブちゃんを熱唱するのが好き）ではないだろう。

「レオナ！ ニツカ！」

俺はあえて叫ぶ。こういう時は、相手に「追われている」ってプレッシャーをかけた方がいい。ただでさえ、重い人間を背負っているわけだからな。焦って転んだりふらついたりしてくれれば御の字だ。倉庫にはいくつかの仕切りがある。おそらく荷物などによって仕分けするためだと思うが、それが碁盤目状になっている。仕切りと仕切りの間は通り抜けられるようになっていて、視界は遮断される。俺は音のした方へ最短距離を突っ切る。厚い板でできた仕切りを動かすことは重くてできないから、いちいち身体を横にしていかなきゃなんねえのが面倒だ。

「レオナ、ニツカ！ おい、待て！」

俺はなるべくビビらせるように巻き舌で叫ぶ。これも俺の経験上からくる方法だ。何かをわざと壊して、派手な音をさせたりするの

も効果的だ。と言ってる間に、何が入ってるのかわからねえ木箱が三つ積み重ねられているスペースに出た。俺は仕切りの隙間に体を滑り込ませる際、わざと箱を両手で押して崩れさせた。

派手な音をさせて箱が壊れ、もうもうと白い煙が湧き起こる。小麦粉が何かだったようで、一瞬にして倉庫内は真っ白い霧が立ち込めたようになった。

「やべっ、かえって邪魔じゃねえかよ！」

あと二枚の仕切りを抜ければ倉庫の反対側だ。俺はげげほ咳き込みながら走り抜けた。俺が入ってきたのと対角線上にある出口は開け放たれていた。

「そこか！」

俺は壁を白く長方形に切り取られたような出口へ向かう。出るとそこはうらぶれた路地だった。

繁華街の裏通りのように、辺りには饅^すえた臭いが充満している。

生ゴミや割れた瓶などが転がっていて、いかにも柄が悪そうだ。

道は左右へ伸びているが、右三十メートルほど先に金髪が揺れているのが見えた。間違いない、あれはレオナだ！

「待てよ、ごるあ！」

俺は石畳を蹴って走り出す。お約束通り、薄汚い猫が威嚇の声を上げながら飛び退く。刑事ドラマなんかでよくあるシーンだ。拳銃を持ってないのが残念だ。

レオナを担いだ男は角を左へ曲がり、その姿はすぐに見えなくなってしまう。俺は木箱をぶつ倒し、洗濯物を剥ぎ取り、何事かとドアを開けて出てきたオバサンの前を走り抜ける。

「なんだい騒々しい！」

後ろから怒鳴られるが謝ってる暇はない。俺は心の中で「スマソ」と手を合わせながら、角を曲がる。十メートルほど先に大きな通りが見えた。人通りがある様子から見ても、どうやら繁華街のようだ。

俺は一旦その通りに入るも、また元の路地へと引き返す。これだけの人混みの中をレオナとニツカを担いで走ったら、どう考えても

騒ぎになる。そうなっていないということは、角を曲がってからここまでの間はどこかで建物の中に入ったということだ。

俺は左右の一軒一軒をじっくり観察しながら歩いていく。ふと、角から三軒目の古いバーのような建物に目が止まる。他の店の前はそれなりに掃除してあったり物がきちんと整理されてるのに、その店だけは妙に薄汚い。飲食店が汚いつてのは致命的だ。それにダノンのようにきちんとした都市で、こんな衛生的に汚い店に営業許可が下りるわけがない。なのにドアには「準備中」のプレート。「休業中」でも「廃業しました」でもない。時間になったら開店するという意味だ。

俺はドアに耳を当てて中の様子を探る。しかし中からは何の物音もしない。担がれていたことから推察して、レオナとニツカは気絶させられたか眠らされていると思われる。だとしたら、音がしないイコールいないとはならないだろう。

俺は静かにドアノブを捻る。鍵は掛かっていない。俺はゆっくりとドアを引いて開けた。中は薄暗く、人気はない。

「すいませ〜ん」

こういう時、日本人なのがいやになる。なんで謝らなきゃいけないんだ？

「……」

奥の方で微かな声が聞こえた。性別や年齢などはわからないが、何となく嫌な感じがする。

俺は薄暗い中を慎重に歩き、カウンターらしき高いテーブルを回り込む。跳ね上げ式の扉を開け、一段低いキッチンへ下りる。流しのようなシンクを背にして、奥への入り口に入る。

通路は店よりも更に暗く、足下さえはつきりと見えない。俺は手探りで進み、右の部屋へ入る。どうやらそこは洗濯室のようで、ひんやりとした石の台が壁際にあるだけだった。木桶が乾いた床に転がっていて、ここが長いこと使われていないことがわかった。

「ちっ」

舌打ちをして振り向いた時、俺の目の前が真っ暗になった。次の瞬間頭に衝撃を受けて、俺の意識はそこで途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623y/>

エンジェルティアの最強執事

2012年1月3日04時49分発行